

逗子の自然

(改訂7版)



逗子市教育研究相談センター

逗子市内で初めて採集!! コオイムシ

採集者は当時逗子中学校1年生の岸遥斗^{きはると}さん



コオイムシ カメムシ目コオイムシ科
体長17~20mm。池や沼、水田などで見られます。餌として水生昆虫などの体液を吸います。メスはオスの背中に産卵します。

○発見した時の状況

日時：2017年9月11日 午後1時30分頃

場所：逗子市立逗子中学校4階教室

状況：床を歩いていたところを発見。発見時はタガメの幼虫かと思い、持っていた筆箱に入れて持ち帰った。家で調べてみると、コオイムシであることが判明した。



その後、自宅水槽で飼育を開始。

与えた餌を捕食する様子や、産卵した卵の様子を観察した。

2019年5月3日に死亡するまで飼育した。



餌に飛びつくコオイムシ



おしりにある呼吸管を水上に出しているコオイムシ

そして、この発見・飼育の様子を論文に!!



※論文は、「かまくらちょうNo.96」(三浦半島昆虫研究会
2020年1月発行)の1~3ページに掲載されました。
この本の85~87ページにも原文を掲載しています。

論文作成を勧めた理科ハウス山浦さん^{やまうら}

小学校1年生の時から理科ハウスに来ていた岸さんに、ある時、コオイムシを発見したことを聞きました。それから来るたびに飼育しているコオイムシの話をしてるので、最初はへえーと思う程度でしたが、1年ぐら経った頃、これはちゃんと発表した方がいいのではと思います、論文作成をすすめました。専門的な知識が必要なため川島さんに指導をお願いしました。

論文作成の指導をした川島逸郎さん^{かわしまいつろう}

論文には、ある程度決まった形式があるため、中学生が初めて書くとなれば、最初からその形式に合わせて書けるはずはありません。私が手を加えて整えることは簡単ですが、それでは意味がないと考え、本人が、思考の流れを書くことに努めた文章をなるべく残し、活かすことに気を付けました。

川島逸郎

生物画家。標本（資料）画を中心とした絵は独学。自然科学に裏付けられた絵を描くために、自らも研究を行う。これまでに執筆した論文や記録報告、出版された著書など関連書籍は多数。

岸さんへのインタビュー

Q：論文執筆をすすめられた時どう思いましたか？

A：貴重な体験（やったことないこと）だから、やってみようと思いました。

Q：論文作成時の苦労は？

A：論文には決まった書き方・ルール（字体・形式段落など）があり難しかったです。川島先生の指導により何度も書き直しをしましたが、否定されている訳ではないので、書き直す作業もおもしろかったです。

Q：今後やってみたいことは？

A：身近な昆虫をたくさん飼育して、よく観察してみたいです。実際に飼育することで昆虫のことが分かるので、もっともっと昆虫のことを知りたいです。



川島逸郎さんからお聞きした「生物を観察するときのポイント」

身の回りで起きている自然の現象や身近な自然に、関心をもつように心がけることが大事ですが、日頃から、幅広い知識を持てるように、本などで広く学ぶことも重要です。予備知識がなければ、ほんの目の前で起きている現象や、視界に現れているはずの生き物にも気づけないものです。生き物の「存在」に気づき、関心が湧いてきた時には、そこから自分が何を探求したいのか、その目的や目標を明確にすることも大事です。

中学生のみなさんへ

日ごろ、私たちが何気なく生活している「逗子」のまちをじっくり歩くと、あらためて緑の多さを感じることができます。道端や路地裏等、いたる所に植物が見られ、また、神武寺、久木大池、池子の森というような、自然が豊富に残っている場所もあります。「逗子」はまさしく自然の宝庫といえるでしょう。そんな身近にある逗子の自然を注意深く観察することにより、自然への理解を深め、自然と人間とのかかわり、生命の尊さ等を少しでも考えていただけたらと願って、本書を作りました。

本書は、第1部「四季の植物」、第2部「ウォッチング逗子の自然」の2部で構成されています。ほとんどの写真は、逗子市内で撮影しました。

第1部の「四季の植物」では、逗子の季節ごとに見られる代表的な植物を取り上げました。例えば、グラウンドや道端でひっそりと咲く植物の名まえを知りたいときや、その植物についての特徴を見たいときなどは、ここを利用しましょう。

第2部の「ウォッチング逗子の自然」では、逗子で見られる動植物をとおしてわかる自然界の様子や、教科書には載っていないような話題を中心に取り上げています。気軽に読んで幅広い知識を身につけるとともに、自然の不思議・素晴らしさにふれていただけたらと思います。

今回の改訂では、第2部に「逗子の年間の天気の変化」のページを追加し、過去6年分の逗子の気象データを掲載しました。また、おもて表紙の裏面では、みなさんの先輩が中学生の時に書き上げた論文について、うら表紙の裏面では、池子の森自然公園内の自然について紹介しています。

本書が、身近な逗子の自然に興味をもつきっかけとなり、逗子の自然を知るために活用され、みなさんが自然への理解を深めてくださることを期待しています。

令和3年 3月

逗子市教育委員会
教育長 大河内 誠

わたしたちの逗子

位置・地形

逗子市は、神奈川県の南東部にあり、三浦半島のつけ根に位置しています。

市の南西には逗子湾が広がり、丘陵地に囲まれています。丘陵地から流れる川のはたらきで砂や粘土が積もった低地が逗子湾に面する市街地を中心として広がり、久木川、田越川のそれぞれの上流に入り込んでいます。

逗子市を含む三浦半島は、地殻変動の激しい地域で、長い年月の間に何度か海の底に沈んだり隆起したりして現在の地形ができました。

逗子の地層からは、貝の化石（シロウリガイ）や不整合が見つかっています。

この貝は、深海の湧水のある場所に生息しています。そのような場所は、プレートとプレートの境界に多く見られるので、大地の成り立ちを知るうえで重要な役割を果たしてくれます。



シロウリガイの化石
(実物は10cmくらいの大きさ)



位置 東経 139度35分01秒
北緯 35度17分32秒
(逗子市役所庁舎)

市内最高地点 海拔 209.9mm
(二子山山頂)

年間平均気温 16.5℃
(2019年) (最高34.0℃ 最低-1.7℃)

年間降水量 1581.0mm
(2019年)

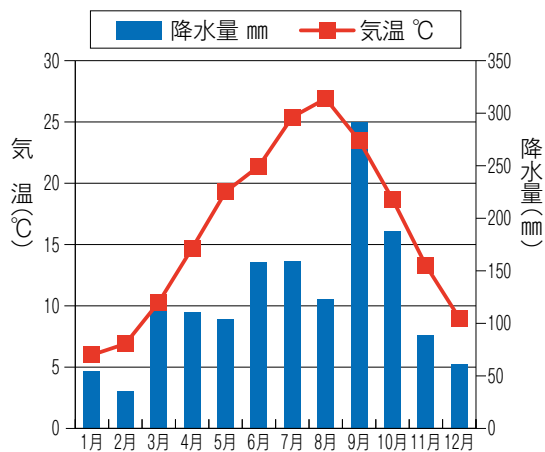
年間降雨日数 127日
(2019年)

気 候

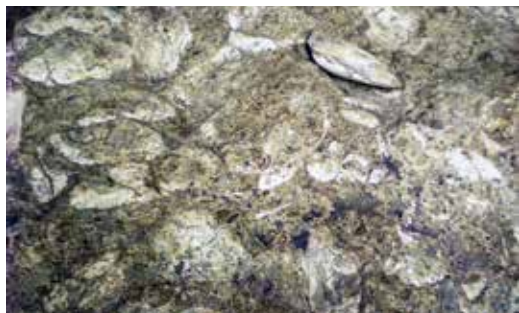
逗子市は、温暖な気候といえます。夏は海からの涼しい風が吹き、冬は海からの暖かい風が吹き、まわりの丘陵地で北風が入りにくいからです。

また、雨もほどよく降り、水にも恵まれています。

雨温図（5年間の平均）



データは2015~2019年の「消防年報」による5年間の平均です。



シロウリガイの化石を含む露頭

目 次

第1部 四季の植物 5

春 ー生命の息吹ー	6
夏 ーきらめく世界ー	20
秋 ー実りの季節ー	28
冬 ー寒さに耐えるー	34

第2部 ウォッチング逗子の自然 39

逗子の生き物紹介	40
1 シダ植物	40
2 コケ植物	41
3 ケイワタバコ	41
4 菌類（キノコ）	42
5 土壌動物	45
6 野鳥	48
7 磯の生物	52
気をつけよう！危険な生物	62
自然の状態を示す生物	65
1 「外来生物」と「在来生物」の植物	65
2 そのほかの外来生物	66
3 水生生物	68
地質データ	69
逗子の年間の天気の変化	73

索引	77
----	----

用語解説	82
------	----

〔参考資料〕 論文：逗子市池子（逗子中学校）でコオイムシを採集	85
---------------------------------	----

第 1 部 四季の植物



春 — 生命の息吹 —



セイヨウタンポポ

キク科

ヨーロッパ原産の多年草で、ロゼット状で冬を越します。受粉しなくても実ができる（無性生殖する）ので繁殖力が強く、乾燥にも強いので、至る所に見られます。フランスでは食用（サラダ）の品種があります。またアメリカではタンポポ酒の原料となっています。ほとんどの総苞片が反り返っていることから識別できます。近年雑種が増えています。



カントウタンポポ

キク科

古来からある多年草の在来種で、ロゼット状で冬を越します。種子ができるためには昆虫による受粉が必要（有性生殖する）なので、昆虫類の多い郊外などに生育します。開花期が外来種よりも短いです（3～5月）。花の下の総苞片が反り返らないことで、セイヨウタンポポと区別できます。近年雑種が増えています。



ジシバリ

キク科

ロゼット状で冬を越す多年草で、タンポポに似ていますが、舌状花の数が少ないです。茎からランナーを延ばして地面をはい、地面を覆っていくことからこの名前がつけました。茎を折ると、タンポポ同様、白い乳液が出ます。別名イワニガナ、葉はスプーン状です。似たものにオオジシバリがあります。



ノゲシ

キク科

ヨーロッパ原産で、ロゼット状で冬を越す越年草です。茎を折ると白い汁が出て、ケシに似ているということでこの名がつけましたが、ケシとは無縁のキク科です。ハルノゲシともいいます。葉の周りに刺のように尖った鋸歯がありますが、触れても痛くありません。種子は良く発芽し、厳しい環境下でも生育します。似たものにオニノゲシがあります。



オニノゲシ

キク科

ヨーロッパ原産で、ロゼット状で冬を越す越年草です。ノゲシに比べ、大きく荒々しく、葉の周りに硬い刺の鋸歯があり、触れると痛いです。総苞片にも硬い刺があります。



オニタビラコ キク科

ロゼット状で冬を越す越年草で、半日陰の環境でも良く育ち、乾燥にも良く耐えます。地際に葉を集中して広げ、1本の茎が枝分かれして多数の花をつけます。花後に綿毛のある実をつけ、茎を切ると白い汁を出します。似たものにコオニタビラコやヤブタビラコがありますが、できた実には綿毛がありません。



ヨモギ キク科

全国に自生し、地下茎で冬を越す多年草です。独特の香りがあり、春摘んだ新芽をおひたしや天ぷら、草餅にして食べます。葉の裏の綿毛は、灸に使うもぐさとして利用できます。夏から秋にかけて茎を高く伸ばして草丈1mほどになり、小さくて目立たない花をつけます。キク科にはめずらしい風媒花で、地下茎をのばして増える多年草です。



ハルジオン キク科

アメリカ原産で、大正時代に園芸植物として帰化しました。ロゼット状で冬を越す多年草です。似たものにヒメジョオンがあります。花期は早く、4~5月頃、つぼみはうなだれ、やがて上を向いて開花します。茎の中は、ストローのように空洞になっていて、葉は茎を抱くようにしてつきます。



ヒメジョオン キク科

北アメリカ原産で、明治時代に園芸植物として帰化しました。ロゼット状で冬を越す越年草です。花期は5~8月頃で、花はつぼみのときから上を向いてついています。ハルジオンよりも背が高く、花は小さくて数が多く、茎の中には空洞がありません。葉も茎を抱きません。



ハキダメギク キク科

熱帯アメリカ原産の一年草で、花期は6~10月です。花は小さいけれど、白い花びらがぎざぎざにつくのが特徴です。花びらは、3~5枚で、一定ではありません。茎は2分岐を繰り返す独特な形です。牧野富太郎が掃き溜めで見つけて命名しました。



アブラナ アブラナ科

秋に芽生え、ロゼット状で冬を越す越年草です。地中海沿岸から西アジアが原産で、日本では弥生時代頃から菜の花という葉物野菜として栽培されていました。江戸時代からは、主に灯油の原料として栽培されましたが、現在は別種のセイヨウアブラナから採油しています。アブラナ科の植物は、花の形に共通（4枚の花びらが十字架の形につく）した特徴があります。



ナズナ アブラナ科

ロゼット状で冬を過ごす越年草です。別名ペンペン草、シャミセングサとも呼ばれます。春の七草の1つで、古くから食用とされました。2～6月に花をつけ、次々に開花して実ができます。実は三味線のパチの形をしています。



ムラサキハナナ アブラナ科

中国原産で、日本には江戸時代に輸入され、今では野生化しています。ロゼット状で冬を過ごす多年草ですが、日本では耐暑性がないため越年草です。花期は3～5月。オオアラセイトウ、シヨカッサイなど、別名がたくさんあります。スジグロシロチョウの食草となっています。



ハマダイコン アブラナ科

ロゼット状で冬を過ごす越年草です。海岸付近や沿岸部の荒れ地に多いです。花期は4～5月。実は水に浮き、海流で運ばれます。



マメグンバイナズナ アブラナ科

北アメリカ原産で、日本には明治以降入ってきました。ロゼット状で冬を過ごす越年草で、花期は5～6月です。荒れ地でたくさん実をつけているので目立ちます。実の形が相撲の行事が持つ軍配に似ています。大型の種でグンバイナズナがあります。



ハコベ ナデシコ科

春～夏に白い花を咲かせる一年草・越年草です。花びらは5枚ですが、深く2つに裂けていて、10枚に見えます。めしべの先が3本に分かれています。ミドリハコベともいいます。また春の七草の1つで、ハコベラともいいます。小鳥のエサや薬にも利用されています。



オランダミミナグサ ナデシコ科

ヨーロッパ原産で、小さい草の状態を冬を越す越年草です。花が密集して咲き、がくが緑色です。在来種のミミナグサは、山間部で見られることもあります。茎に小さい葉が向かい合っついてついている様子をネズミの耳に見立てて、この名前となりました。



ウシハコベ ナデシコ科

ハコベに似ていますが、葉や草丈など大きいので区別できます。花びらの特徴もハコベと同じですが、めしべの先が5本に分かれています。



タネツケバナ アブラナ科

水辺の湿地や水田などに群生し、ロゼット状で冬を過ごす越年草です。イネの種もみを水につけておく頃に開花するのでこの名がつけました。実は、熟すと軽く触れるだけで、中の種子をはじき飛ばします。若い葉は、噛むとピリッと辛く、漬物やおひたしなどにして食べます。



ムラサキカタバミ カタバミ科

南アメリカ原産の多年草で、江戸時代に観賞用に輸入され、野生化しました。地下にたくさんの小さなりん茎（けい）を作って増えます。花の中心が白く、おしべの葯（やく）も白いです。種子はつけません。明るさに反応して花が開きます。



イモカタバミ カタバミ科

南アメリカ原産の多年草で、別名フシネハナカタバミです。ムラサキカタバミに似ていますが、花の中心の色が濃く、おしべの葯は黄色いです。地下にイモのような地下茎があり、子イモをつくって増えます。乾燥に強く、砂地を好み、最近増えつつあります。



カタバミ カタバミ科

春から秋にかけて咲く多年草です。熟した実にさわると、縦に裂けて中から少し粘り気のある種子が飛び散ります。葉にはシュウ酸を含み、噛むと酸っぱいのでスイモノグサ、スイバという別名があります。葉と花は、明るさによって閉じたり開いたりします。ヤマトシジミという小型のチョウの食草となっています。



アカカタバミ カタバミ科

カタバミの品種の1つとされ、葉が赤みを帯びていて、黄色い花の中心部も赤みを帯びたものが多くみられ、全体的にカタバミよりやや小型です。強い日差しや乾燥に強い植物です。



ニワゼキショウ アヤメ科

北アメリカ原産の一年草で、明治時代に日本に入ってきて野生化しました。花期は5～6月で、花は1日しかもちません。花は白いものと薄紫色のものがあり、どちらも中央部は黄色いです。丸い実をつけます。



カキドオシ シソ科

全国の道端などに生える多年草です。花は4～5月に咲き、薄紫色で斑点があります。茎は長く横にはい、ところどころに根をおろします。垣根を通して伸びてくるので、この名がつけました。葉をもむとタイムに似た強い香りがし、肉料理のスパイスや茶などに利用されます。



キュウリグサ ムラサキ科

アジア原産で、麦とともに日本にやってきた越年草です。道端などに生え、葉をもむとキュウリに似たにおいがするのでこの名がつけました。ロゼット状で冬を過ごします。花茎の先は、はじめ巻いていますが、花が咲くに従ってほどけて伸びていきます。



オオイヌノフグリ オオバコ科

ヨーロッパ原産の越年草で、明治時代に帰化したようです。在来種のイヌノフグリよりも大きいのでこの名になりました。別名はルリカラクサ、ホシノヒトミなどです。早春に青い花をつけます。毛の生えた実の形が犬の陰のうに似ているので、イヌノフグリという名がつけました。



ハハコグサ キク科

冬をロゼット状で過ごし、春になると茎をのぼす越年草です。花期は4～6月です。若い葉を草餅に入れたり、咳止め用の茶にしたりします。春の七草の1つで、別名はゴギョウ、オギョウです。茎や葉に毛が多く、摘み取って水に入れると、茎は銀色、花は金色に輝いて見えます。



タチイヌノフグリ オオバコ科

ヨーロッパからアフリカが原産地です。在来種のイヌノフグリに似ていますが、茎が直立して、その先に花をつけるのでこの名がつけました。花は3～4mmで小さく、咲いている時間も短いため目立ちません。



ウラジロチチコグサ キク科

南アメリカ原産の一年草で、最近急激に増えてきました。葉の表にはつやがあり、裏には毛がたくさん生えています。また茎にも毛が生えています。花期は5～9月。冬はロゼット状で過ごし、やがて地をはって茎をのぼし繁茂し、花期には立ち上がり開花します。



ヒメオドリコソウ シソ科

ヨーロッパ原産の帰化植物、越年草です。草丈が50cmくらいになるオドリコソウに似ていますが、小型なのでヒメを加えて名前がつきました。3～5月開花、花はうすい赤紫色で唇型をしています。花が環状に並んでいるようすを踊り子が並んで踊る姿に例えています。



ホトケノザ シソ科

3～5月に開花する越年草です。紫色をした唇型の花の下に2枚の葉がくっつくように開いているので、丸く茎を取り巻いているように見えます。その花と葉の様子が仏と仏座に似ているのでこの名がつきました。このホトケノザは食べられません。春の七草のホトケノザはコオニタビラコ（キク科）のことです。



カラスノエンドウ マメ科

3～6月に開花する越年草です。野豌豆（のえんどう）の仲間では花や草丈が大きいことから、カラスノエンドウという名前がついています。花はマメ科特有の蝶形です。実は熟すと黒くなります。ヤハズノエンドウともいいます。近い仲間にスズメノエンドウ、カスマグサがあります。カスマグサは、「カラス」と「スズメ」の間（ま）＝中間という意味です。



ムラサキケマン ケシ科

4～6月に開花する越年草です。林の周りや湿った草地に育つ、高さ40cmくらいになる植物で、有毒植物です。赤紫色の筒状の花をつけ、その後は、豆のような形の果実となります。



シロツメクサ マメ科

5～10月に開花する多年草です。ヨーロッパ原産の帰化植物です。マメ科特有の蝶型の白い花が球状に付きます。葉は3小葉からなる複葉です。江戸時代末期には、オランダからのガラス製品が割れないように、詰め物として箱の中に使われていました。



ツメクサ ナデシコ科

3～7月に開花する一年草です。名前のツメは、シロツメクサとは違い、鷹などの爪の形に由来しています。葉は向かい合って付き、花びらは6枚でナデシコの仲間です。草丈も花も小さいので目立たないですが、乾燥に強い植物です。



コマツヨイグサ アカバナ科

北アメリカ原産の帰化植物、5～10月に開花する多年草です。陽当たりのよい空き地や砂地などで見られます。地面をほうように茎を伸ばし、葉と茎の間から花を2つ付けます。花は夕方開き、朝にはしぼむ一日草です。



ケキツネノボタン キンポウゲ科

日当たりがよく湿ったところによく生える多年草です。花期は5～7月で、黄色い花を咲かせます。キツネノボタンによく似ていますが、全体に毛が生えていることや、果実の先端が曲がっていないことで、区別できます。



ユウゲシヨウ アカバナ科

道端や空き地でもよく見かける多年草です。花期は5～9月で、夕方に咲くことからこの名がついたとされています。実際には昼間からでも、開花している様子が見られます。



ナガミヒナゲシ ケシ科

4～5月に開花する越年草です。地中海原産の帰化植物で、近年広がりがつあります。道路脇の土手や草地などで群生しています。花の色はオレンジ色で、茎を切ると黄色の汁が出てきます。実からは、1000～2000粒の種子ができると言われています。



ヒルザキツキミソウ アカバナ科

5～7月に開花する多年草、北アメリカ原産の帰化植物です。花は白またはうすいピンク色で、他のツキミソウの仲間と違い、昼間に花が咲きます。道路沿いの土手や草地などで見られます。



オオバコ

オオバコ科

4～9月に開花する多年草です。グラウンドや道端など、人がよく踏むような場所でも生育します。葉が大きいので大葉子と名がつけました。花穂には花びらのない花が多数つき、先端から下方に向けて開花していきます。2本の花穂を互いに引っ掛けて綱引き遊びなどができます。



スズメノカタビラ

イネ科

3～11月に開花する一年草です。庭や空き地など、いたるところで見られる植物です。踏みつけにも強く、細かい根をしっかりと張ります。スズメは小さいことをあらわし、カタビラは粗末な着物の意味で、小穂の様子からこの名がつけました。



フキ

キク科

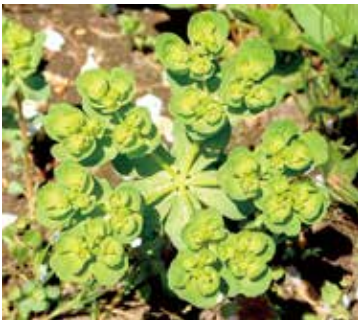
2～4月に開花する多年草です。早春に出てくるフキノトウは花の芽で、雄花の集まりと雌花の集まりの2種類があります。雌花のフキノトウは、受粉後30cmほどに伸び、綿毛のついた種子を散布します。フキノトウはいろいろな料理に使われます。若い葉や葉柄も食べられます。



ツバキ

キク科

10～11月に開花する多年草です。海岸近くの土手や岩場に群生する植物です。厚手のつやのある葉をしていて、乾燥や潮風に耐えることができます。秋に花茎が伸び、黄色の花をつけます。



トウダイグサ

トウダイグサ科

4～6月に開花する越年草です。陽当たりのよいやや湿ったところに生育します。伸びた茎の上部に傘を広げたように花をつけます。花びらのように見えるのは苞（ほう）で、中央の壺型の中に雄しべ雌しべがあります。トウダイは電気のない頃の部屋の照明の燈台のことです。有毒植物です。葉を傷つけると白い汁が出てきます。



ヤエムグラ

アカネ科

5～6月に開花する一年草です。葉は6～7枚が輪のように茎の周りにつきます。茎や葉に細かい刺があり、伸びた茎が絡みつき藪を作ります。服にもくっついてきます。白い小さな花を咲かせ、緑色の丸い実を2つずつつけます。実もよく服にくっつきます。



セリ セリ科

7～8月に開花する多年草です。小川や田など湿ったところに自生する植物です。香りがよく、食用になります。夏に5枚の花びらを持つ小さな花が集まったものが半球状に広がります。春の七草のうちの一つです。



オランダガラシ アブラナ科

5～6月に開花する多年草です。小川や用水路などの水際に群生する植物です。ヨーロッパ原産の帰化植物です。花は4枚の白い花びらが十字型につきます。別名はクレソンといい、食用として栽培されます。



イヌワラビ オシダ科

公園や庭など湿り気のある場所のいたる所で見られる落葉性のシダ植物です。葉は草質で柔らかく、光沢はありません。葉の裏に胞子のうができて、そこから胞子が出ます。



ゼンマイ ゼンマイ科

草地や林など広く自生するシダ植物です。渦巻き状で綿毛でおおわれた新芽の様子が、銭をひもで通してぐるぐる巻いた銭巻きに似ていることから、ゼンマイになりました。春に出る綿毛をかぶったうず巻き状の若葉は食用になります。



ヘビイチゴ バラ科

4～6月に開花する多年草です。陽当たりのよい空き地やグラウンドなどで見られます。葉は小型で、地面を這うように茎が伸びます。花後、光沢のない紅いイチゴができます。毒はありませんが、美味しくありません。近縁種のヤブヘビイチゴは、林の縁などで見られ、葉も花も大きく果実に光沢があるので区別できます。



スギナ トクサ科

直立した茎の節から多くの枝を車輪状に伸ばし、各枝にはさや状の葉と細い茎が交互につながるシダ植物です。早春に、胞子を作るためのツクシを地下茎から伸ばします。ツクシは、はかまの部分をとって佃煮にして食べることができます。



ヒメウス

キンポウゲ科

3～5月に開花する多年草です。山沿いや草むらの陽当たりのよい場所に自生する植物です。ウスは鳥兜(トリカブト)のことで、実の形が鳥兜に似ていて小型なのでヒメウスといえます。目立ちませんが、かわいい花をつけます。半日陰のようなところにも生えます。



タチツボスミレ

スミレ科

2～4月に開花する多年草です。春先の山などによく見られるスミレです。咲き始めのときは草丈は低いですが、次第に花茎が立ち上がったように伸び、花が目立つようになります。葉の付け根にある托葉は櫛(くし)のように切れ込みます。



ヤマブキ

バラ科

谷沿いの湿ったところに自生する落葉低木です。人家にもよく植えられています。茎はジグザグに折れ曲がり緑色です。4～5月開花後1～5個の種子がつき、9月に黒く熟します。花の色から山吹色という色ができました。



シャガ

アヤメ科

4～5月に開花する多年草です。中国原産のかなり古い時代に渡来してきた帰化植物です。人里に近い沢沿いや農家の庭先などに見られます。花は朝開花し、夕方にはしぼんでしまう一日花です。



ホウチャクソウ

イヌサフラン科

4～5月に開花する多年草です。森や林の中に自生している有毒植物です。花が寺院の軒に吊されている宝鐸(ほうちやく)に似ているのでこの名がつけました。春から初夏にかけて、うす緑色の花を下向きにつけます。



トキワツユクサ

ツユクサ科

4～9月に開花する多年草です。南アメリカ原産の帰化植物です。道端や林の縁など、湿った場所によく見られます。常緑で冬でも枯れず繁殖力が旺盛です。別名、ノハカタカラクサともいいます。生態系被害防止外来種に指定されています。



アケビ アケビ科

林の縁などの低木に絡みつく、つる性の植物です。葉は5枚の小葉からなり、縁にギザギザがありません。花は4～5月に開花し、雄花と雌花に分かれます。小葉が3枚のものはミツバアケビといいます。秋に果実が割れ、中の果肉は甘く食べられます。



フジ マメ科

山野に自生するつる性の落葉樹で、木々に巻き付いてつるを伸ばします。樹木の上部に葉を広げ、5～6月にマメ科特有の蝶型の花を房状につけます。



ニリンソウ キンボウゲ科

樹林の下草として群生する多年草です。3～4月、台のような葉の上に2輪の白い花が咲くのでニリンソウといいます。春の山菜として知られていますが、毒のあるトリカブトと似ているので注意が必要です。



ウラシマソウ サトイモ科

野山の林の縁などの半日陰の所に自生する多年草、有毒植物です。4～5月に開花し、花は仏炎苞という頭巾のような形の中にまとまって花軸を形成します。この花軸から伸びた細長いひものようなものを、浦島太郎の釣り竿・釣り糸に見立ててこの名がつけました。



マムシグサ サトイモ科

野山の林の縁などの半日陰の所に自生する多年草、有毒植物です。4～5月開花し、花は仏炎苞という頭巾のような形の中にまとまってつきます。ウラシマソウのように細長いひも状のものはありません。仏炎苞の色と形がマムシの頭部に似ていることからこの名がつけました。



ヤマザクラ

バラ科

落葉高木で山地に自生しています。古くは桜というとヤマザクラを指しました。寿命は長く大木になります。春、葉が開いていくと同時に花も開きます。花はほぼ白色。実は初夏に黒紫色に熟し、発芽能力があります。冬芽や花柄に毛がありません。



ソメイヨシノ

バラ科

公園や堤防などに植えられる落葉高木です。葉が出る前に花が咲きます。実はできますが熟さないで落下するので、接ぎ木で繁殖させています。冬芽や花柄には毛があります。エドヒガンとオオシマザクラの雑種で、元は1本の原木から始まり、枝を切って大島桜の苗木に接木しながら増やしています。



スギ

ヒノキ科

常緑樹で高木。日本原産で各地に自生しています。古くから植林され、樹皮は赤褐色で縦に長く裂けます。材は建築用材として使われます。春、枝先についた雄花から多量の花粉が放出され、風によって遠くまで運ばれます。



イロハカエデ

ムクロジ科

山地に普通に生えますが人家にも植えられる落葉高木です。春、赤紫の小さな花を咲かせ実は薄い翼を持ち、竹とんぼのような形をしています。枝や葉はほぼ無毛でタカオカエデとも呼ばれます。カエデはカエルの手由来します。



ハコネウツギ

スイカズラ科

海岸に近い崖などに自生する落葉性の樹木で葉の表面にはつやがあります。枝先や葉の付け根から2〜3個ずつ花をつけます。開花したときは白色ですが、次第に紅色に変わります。箱根にはほとんど自生していません。



キブシ

キブシ科

林の縁や雑木林などの湿った場所に見られる落葉樹で、雄木と雌木があります。早春、葉が出る前に、釣鐘状の花がひも状に並び垂れ下がって咲きます。五倍子（ふし）と呼ばれる染料の代用品となるためこの名がつけました。



タブノキ

クスノキ科

海岸付近の山地に自生する常緑の高木樹で、高さ20メートルほどにもなり、人の手が入らなければ極相林となります。葉には楠に似た香りがあります。花は春、新葉と一緒に黄緑色の花をつけます。別名、イヌグスといいます。



シロダモ

クスノキ科

暖地の山野で湿った土地に自生し、雄木と雌木があります。春の若葉は表も裏も褐色の毛に覆われ柔らかく垂れ下がります。秋に黄色の花を咲かせ、実は翌年赤く熟します。葉の裏が白いことからこの名がつけました。



スダジイ

ブナ科

暖地の山地に自生する常緑の高木樹で庭や公園などにも植栽されます。葉の表面は光沢がありますが、裏は灰褐色の細かい毛が密集します。5～6月に開花し、雄花は房状になり垂れ下がり、強い匂いで虫を引き寄せます。雌花は受粉後、実を付け翌年の秋に熟します。実は生で食べられます。



ヤブニッケイ

クスノキ科

シイやタブノキ林に多く生える常緑樹で、葉は3本の葉脈が目立ち、裏側は粉を吹いたように白っぽく見えます。葉を揉むとニッケイのよい香りがします。6月頃に長い柄を持つ花が咲き、花後の実はその年の秋に熟し黒紫色となります。

夏 — きらめく世界 —



ハマヒルガオ ヒルガオ科

海岸や湖、川岸の砂地をはう多年草です。他のヒルガオの仲間とはつる性ですが、これはほふく性です。5～6月にピンクの花が咲きます。



ネジバナ ラン科

高さ20～25cmの多年草で、日当たりの良い所を好みます。別名モジズリ（戻摺）。ねじれている様を恋に身をよじらせていることに重ねて、百人一首にも詠まれています。ピンクまたは白い花が4～9月に咲きます。右巻きと左巻きの比は約1：1ということです。



イヌガラシ アブラナ科

あぜ道など、湿ったところに生育する多年草です。4～6月に小さな黄色の花を咲かせますが、まれに秋にも咲きます。スカシタゴボウに似ていますが、葉の切れ込みが浅いです。イヌには役に立たないという意味もありますが、本種の若い葉はピリリと辛く、おひたしなどにできます。



ハマボツス サクラソウ科

海岸近くでよく見られる越年草で、5～6月に白い花が咲きます。実が仏具の扨子（ぼつす）に似ていることからこの名がついたといわれています。



ギシギシ タデ科

タデ科の多年草です。湿った道端、湿地、水辺、田のあぜなどに生え、6～8月に小さな緑色の花が咲きます。茎をこすりあわせるとギシギシいうのでこの名がついたともいわれます。白いさやに包まれた若い芽は、オカジュンサイと呼ばれ、食べられます。根は薬になります。



コメツブツメクサ マメ科

道端や河原などに生える一年草です。コゴメツメクサ、キバナツメクサともよばれます。5～7月に花が咲きますが、花は咲き終わっても落ちないところが、みかけは似ているコメツブウマゴヤシと異なります。



ブタナ キク科

タンポポと異なり30~60cmの花茎が途中で枝分かれます、多年草です。道路脇、空き地、草原などに生育し、花期は6~9月です。フランス名の「ブタのサラダ」からこの名がついたようです。タンポポモドキという別名もあります。全体が食用になります。



ヒメジョオン キク科

道端でよく見かける多年草です。ハルジオンによく似ていますが、花期が5~8月と遅く、茎は中が空洞ではなく、つぼみが下を向かないなどの点が異なり、区別ができます。(P.7参照)



イタドリ タデ科

日当たりのよい道端などを好み、若い葉には赤い斑がある多年草です。食べると酸味があることから別名スキャンボともよばれます。シュウ酸を含むため、あくを取って調理をし、食べすぎない方がよいです。



ギョウギシバ イネ科

日当たりのよい道端、校庭、海岸などを好む多年草です。踏みつけに強く、地表をほふくする茎から葉が出ます。初夏に緑色の目立たない花が咲きます。アメリカ南部では、バミュダグラスと呼ばれ、重要な牧草です。日本でなぜこの名で呼ばれるのかには、いろいろの説があります。



メヒシバ イネ科

日当たりのよい道端や空き地を好む一年草です。オヒシバより全体的に細身で、踏みつけのより少ない場所に生えます。



オヒシバ イネ科

日当たりのよい道端や空き地を好む一年草です。メヒシバよりたくましく、引きちぎるのに力が要るので、チカラシバとよばれることもあります。チカラシバは別にあります。(P.28参照)



スイレン

スイレン科

水生の多年草で、「睡蓮（水蓮ではない）」と書きます。夕方になると花を閉じるからです。この仲間で日本に自生するのは高原のヒツジグサのみで、逗子で見られるものは園芸種です。水面に葉や花を浮かべるので、他の植物とはちがって気孔は葉の表にあります。葉も花も水面から立ち上がることはありません。



ハス

ハス科

水生の多年草で、7～8月に白またはピンクの花が咲きます。スイレンと同様午前が開いて午後閉じますが、水面から立ち上がるので区別は容易です。咲いた後の果実の形から、「ハチス」が転じてこの名がついたようです。地下茎は「レンコン」で、野菜としても栽培されています。



コヒルガオ

ヒルガオ科

つる性の多年草です。ヒルガオと比べると花が小さく（直径3～4cm）、咲き出すのは5月後半で少し早いです。ヒルガオと異なり、花柄にひれがあります。



スイカズラ

スイカズラ科

つる性の木本で、常緑なので別名ニンドウ（忍冬）といわれます。5～7月に白から黄色に変色する花が咲き、金銀花の異名があります。甘い香りがし、口にくわえると甘い蜜が吸えるので、この名がつけました。いろいろな部分が漢方薬に使われます。



ヘクソカズラ

アカネ科

つる性の多年草で、日当たりの良い林縁、道ばたなどで他の植物に左巻きにからまっています。葉や茎に悪臭があるので、この名がつけました。8～9月に咲く花がお灸をすえた跡に似ていることから、「ヤイトバナ（灸花）」とも呼ばれます。秋には黄褐色の果実になり、ドライフラワーの材料に使われます。（P.38参照）



イタビカズラ

クワ科

常緑のつる性の木本で、イチジクの仲間です。6～7月に果実のように見える6mmぐらいの小さな花をつけます。雌雄異株で、メスの木だけ秋に黒紫色の実が熟します。



ヤブガラシ

ブドウ科

つる性の多年草で、日当たりの良い林縁、道ばたなどで他の植物を覆いかくすのでこの名がつけました。6～8月に咲く花は蜜が豊富で、チョウやハチが沢山集まります。秋に黒い実が熟します。つる先のやわらかい葉は、おひたしや天ぷらにして食べることができます。



ノブドウ

ブドウ科

つる性の落葉性木本で、日当たりのよい林縁などで他の植物にからみついています。7～8月に黄緑色の小さな花を咲かせ、秋に白・紫・青などのカラフルな実をつけますが、味はまずく、寄生虫がよく入っているので、食べない方がいいです。



キツタ

ウコギ科

日本に自生するつる性の木本で、常緑なので「フユツタ」ともいいます。林縁だけでなく林内にも生え、他の樹木や岩などに巻きつくのではなく、茎から気根を出して這い登っていきます。10～12月に小さな花を咲かせ、翌春に黒い実が熟します。



セイヨウキツタ

ウコギ科

常緑のつる性の木本で、ヨーロッパや西アジアが原産です。学名の「ヘデラ」や英名の「アイビー」でも呼ばれます。成長が早く、日本でも野生化してあちこちで見られます。園芸種として品種改良され、斑入りのものもあります。



テイカカズラ

キョウチクトウ科

常緑のつる性の木本で、他の樹木や岩などに気根を出して這い登ります。藤原定家が式子内親王に焦がれ、死後墓に生まれ変わって彼女の墓にからみついたという伝説にちなんで名づけられました。5～6月に白やクリーム色でジャスミンのようなよい香りのする花を咲かせ、果実には白い冠毛があります。



ツタ

ブドウ科

つる性の落葉性木本で、巻きひげの先端が吸盤になっていて、他の植物や岩などに張り付いて這い登っていきます。ウコギ科のキツタに対し、冬に葉を落とすので「ナツツタ」とも呼ばれます。夏に緑色の小さな花を咲かせます。江戸時代までは、ツタの樹液を煮詰めて「アマツラ」とよび、水飴とともに甘味料に使っていました。



カラスウリ

ウリ科

つる性多年草で、日当たりのよい林縁などで他の植物に巻き付いています。雌雄異株で、7～9月にかけて夕方から白いレース状の花を咲かせます。根にはデンプンを多く含んだ塊根ができ、栄養生殖をします。この塊根は、薬に利用できます。(P.32参照)



ツルニチチソウ

キョウチクトウ科

つる性多年草で、ヨーロッパ原産の帰化植物です。地面を這うように広がり、日陰でも育ちます。もともとは常緑ですが、寒い所では冬に葉が枯れます。春～初夏に青紫色の花を咲かせます。全体に「アルカロイド」という毒の成分が含まれているので、食べないでください。



ホタルブクロ

キキョウ科

開けた草原や道ばたのやや乾燥した所を好む多年草で、暑さに弱く、日陰でも育ちます。6～7月に袋状の花を咲かせます。



ケイワタバコ

イワタバコ科

湿った岩壁に着生する多年草です。イワタバコの変種で、茎や葉の裏などに毛が密生している他、花期も8月ではなく6月頃と早く、色も青みがかっています。



オカトラノオ

サクラソウ科

日当たりのよい草原に、普通群生する多年草です。高さは50～100cmで、6～7月に白い花を、少し曲がった房のようにつけます。



ゲンショウコ

フウロソウ科

道ばたや草原、土手などの日当たりのよい所に生える多年草です。7～10月頃に花が咲きます。逗子では白い花が多いですが、西日本ではピンクの方が多そうです。秋に熟した種子がはじけ飛ぶとおみこしの先端のようになるので、「ミコシグサ」ともいいます。夏に地上部を刈り取って干し、煎じて便秘や下痢、食あたりの薬にします。



ノシラン クサスギカズラ科

海岸近くの林の下など、薄明るい場所を好む多年草です。葉の長さは50~80cmになり、7~9月に白い花を房状に咲かせます。年が明けると、ジャノヒゲより大きい1cmぐらいの果実がコバルトブルーに熟します。



ユキノシタ ユキノシタ科

湿った半日陰を好む常緑の多年草です。人家の日陰で栽培されることもよくあります。葉は円形に近く裏は赤味を帯びていて、5~7月に沢山の小さな白い花を咲かせます。葉を山菜として天ぷらやおひたしにして食べるほか、漢方薬として虫刺されや火傷、風邪薬などに広く利用します。



ウツギ アジサイ科

落葉性の低木で、山野の日当たりのよい所に自生するほか、畑の境や庭木としても栽培され、八重やピンクの花などいろいろな変種があります。5~7月に枝先に白い花を沢山咲かせ、ウツギのウをとって、「ウノハナ(卵の花)」とも呼ばれます。ウツギ(空木)と呼ばれるのは、茎が中空になっているからです。



ドクダミ ドクダミ科

日陰の湿った所を好む多年草です。全体に強い臭気があります。5~7月に花を咲かせますが、白い部分は花びらではなく、葉の一部が変化したものです。加熱すると臭気が和らぐので天ぷらにするほか、葉を乾燥させたドクダミ茶を高血圧の薬に利用しています。



ツククサ ツククサ科

やや湿った道ばたや空き地を好む一年草です。6~9月の明け方から花を咲かせ、午前中にはしぼんでしまいますが、じっくり観察すると面白いです。花弁は3枚で2枚が大きくて青く、1枚は小さくて白ですが、大きい花弁が無色だったり、小さい花弁が青かったりするものもあります。色が着きやすくまた落としやすいので、布地の下絵などに利用されました。



ヤマユリ ユリ科

日当たりの良い林縁や日陰で草地の斜面などを好む、日本特産の多年草です。沢山自生しているのも、神奈川県「県の花」になっています。7~8月に香りの強い、大きな白い花を咲かせます。花が咲くまでに5年はかかるといわれ、古い株ほど沢山の花をつけます。球根はクリーム色でやわらかく、縄文時代には食用にもなっていたようです。



ガクアジサイ

アジサイ科

落葉性の低木で半日陰を好み、暖かい海岸近くの山野に自生します。園芸品種の原種としてヨーロッパで品種改良され、逆輸入されたものは「セイヨウアジサイ」と呼びます。6～7月に咲く集合花について、中央部を「両性花」、周辺部の雄しべや雌しべを持たないものを「装飾花」と呼び、このような咲き方を「額咲き」といいます。



アジサイ

アジサイ科

落葉性の低木で、半日陰を好みます。古来から栽植されていてさまざまな変種があります。6～7月に白、青、紫からピンクなど、さまざまな色の花を咲かせますが、これは花弁ではなく萼（がく）が変化したものです。花の色は、土壌の性質や開花してからの日数によって変化します。



タマアジサイ

アジサイ科

落葉性の低木で、山地の半日陰の道端などに自生します。他のアジサイと異なり、つぼみが玉のようになり、7～8月と少し遅れて花が咲きます。一つのつぼみの中に、両性花と装飾花のグループがいくつか入っていて、それらが日をずらして順次には開花していきます。アジサイの仲間は毒の成分を含むため、食べないでください。



ミズギ

ミズギ科

渓谷周辺など、水分の豊富な斜面などに自生する落葉性の高木で、高さ10～15mぐらいになります。公園などにも植栽され、5～6月に枝先に沢山の白い花を咲かせます。春先に芽を吹くとき沢山の水を吸い上げることから、この名がつけました。



エゴノキ

エゴノキ科

明るい所を好む落葉性の小高木で、雑木林の林縁部などに自生するほか、庭木などにも使われます。5～6月に開花し、卵型の果実が10月に熟しますが果皮に毒の成分を含むため、昔は川の魚をしびれさせて捕まえるのに使っていたといわれます。果実がえぐいので、この名がつけました。種子は鳥たちが好んで食べます。



クサギ

クマツヅラ科

日当たりのよい林縁などに生育する、落葉性の小高木です。葉に一種独特のにおいがするので、この名がつけました。8月に咲く花は甘い香りがし、昼はチョウ、夜はガが沢山集まります。10～11月に熟す青い果実は、がくが赤く開いて目立つため、鳥が集まります。若い芽を山菜、葉を茶にするほか、実は草木染の水色、がくは灰色にも利用されます。



イヌビワ

クワ科

明るい所を好む落葉性の小低木で、林縁部などに自生します。イチジクの仲間で、実のような果囊（かのう）の内側に花ができます。雌雄異株で、雄株は冬も果囊が残り、中でイヌビワコバチが越冬します。花は4～5月に果囊の内側に咲き、羽のある雌バチだけが雄株から出て、受粉してまわります。果囊の中に入ることができるハチなしでは、受粉ができないのです。このような関係を「共生」といいます。雌株の果囊は10月頃から黒く熟し、水気たっぷりで甘いです。



ナツグミ

グミ科

明るい所を好む落葉性の小高木で、林縁部などに自生しますが、庭木にもよく植えられています。4～5月に白い花がぶら下がるように咲き、5～6月頃赤く熟した果実（偽果：子房ではない部分が熟したもの）は楕円形で2cm以上あり、甘くて食べることができます。秋に丸い実ができるアキグミと区別して、この名がつけました。



ヒメコウゾ

クワ科

明るい所を好む落葉性の低木で、林縁部や低い山地の道端などに自生しています。葉脈が、葉の縁で隣の葉脈と合流することが特徴です。4～5月同じ株に、白い小さな雄花は丸く集まり、赤い雌花は枝先に咲きます。7～8月に果実（集合果）が赤く熟しますが、口当たりはあまり良くありません。



ヤマグワ

クワ科

丘陵から低い山地にかけて自生する落葉性の低～高木で、普通3～5mですが、大きいものは10mにもなります。雌雄異株ですが、同株の場合もあります。4～5月に雄花も雌花も小さく集まって咲き、6～7月に果実（集合果）が赤から黒紫色に熟し、おいしく食べることができます。「マルベリー」といって、ジャムなどに加工できます。

秋 — 実りの季節 —



エノコログサ イネ科

日当たりのよい畑や道端、空き地などに群生する一年草です。夏から秋にかけて出る穂がイヌの尾に似ていることから、この名がつけました。「ネコジャラシ」ともいいます。8～9月に緑色の花が集まって咲き、卵形の果実は食べることができます。



アキノエノコログサ イネ科

日当たりのよい畑や道端、空き地などに群生する一年草です。エノコログサよりやや大きめで穂も長く、エノコログサが直立した穂なのに対し、うなだれています。花期がエノコログサより長く秋まで穂が出ているので、この名がつけました。



ススキ イネ科

山地の日当たりのよい丘陵地や高原に群生する多年草です。7～8月が花期で、沢山の花が集まって咲いた後、果実に綿毛があるので白い穂になります。これを動物の尾にみたてて「尾花」とも呼び、秋の七草の一つに数えられています。



キンエノコログサ イネ科

日当たりのよい畑や道端、空き地などに群生する一年草です。穂にびっしり生える毛が黄色で陽に輝いているように見えることから、この名がつけました。ヨーロッパ原産ですが、エノコログサより先に日本に広がったようです。



チカラシバ イネ科

日当たりのよい道端や土手、耕作地の周辺などに生えている多年草です。根が発達していて踏みつけに強く、引き抜くことが困難なので、この名がつけました。8～10月に花が咲き、ブラシのような穂になります。動物などに毛の先端がひっかかると、果実がはずれて運ばれます。



コガマ ガマ科

池や沼などの水辺に生える多年草です。花穂の下の太い部分が雌花の集合で、先端の細い部分が雄花の集合です。ガマ（雌花穂の長さ15～20cm）より小型（雌花穂が6～10cm）で、高さ1～1.5m、葉の幅0.5～1cmです。三浦半島には、ガマより多く分布しています。



クズ

マメ科

つる性の多年草で、土手や林縁で他の植物に巻き付いたり地面を這ったりしています。成長が早く、ひと夏で10m伸びるともいわれます。荒地でもよく育ち、8~9月に花を咲かせ、秋の七草の一つです。根にはデンプンを貯蔵しているので、クズ粉として利用しています。



セイタカアワダチソウ キク科

川の土手などやや湿った開けた場所に群生する北アメリカ原産の多年草です。適応力が強く、乾燥した空き地などにも戦後急速に分布を広げました。10~11月に黄色い花を咲かせ、豊かな蜜を供給する虫媒花です。



ミゾソバ

タデ科

湿った所を好む一年草で、田のあぜや水辺などに見られます。8~10月に小さな集合花を咲かせます。花の色は白からピンクとさまざまです。花びらに見える部分はアジサイと同様に「がく」で、花弁はありません。葉を牛の顔にみたとて「ウシノヒタイ」ともいいます。



ママコノシリヌグイ

タデ科

やや湿り気のある林縁や道端を好む一年草です。茎や葉柄にトゲがあるので、この名がつけました。「トゲソバ」ともいいます。5~10月にミゾソバに良く似た花が咲きますが、トゲがあることと、葉の形が三角であることで、区別がつけます。



イヌタデ

タデ科

道端や畑、空き地によく見られる一年草です。花期が6~11月と長く、おまごとしてこの花をむして赤飯にみたとて遊ぶことから、「アカマンマ」とも呼ばれます。花びらに見えるのは「がく」で、これはタデ科の特徴です。



ヒメツルソバ

タデ科

日当たりのよい道端などでよく見かける常緑の多年草です。ヒマラヤ原産ですが、明治時代にロックガーデン用として輸入され、寒さに強く繁殖力も旺盛なので半野生化しています。花期は5~11月と長く、小さな花が金平糖のように密生して咲きます。



コセندانグサ

キク科

道端や空き地、河原にみられる一年草で、熱帯原産の帰化植物です。花期は9～11月で、タンポポなどと異なり黄色い筒状花のみで、舌状花がありません。果実の一つひとつは細長く、先に棘があって動物のからだなどにくっついて運ばれます。



ヌスビトハギ

マメ科

草地、道ばた、林縁などを好む一年草です。花期は7～9月で、ハギに似た小さなピンクの花をややまばらにつけます。果実は2つにくびれて眼鏡のような形で、表面に密生したかぎ状の毛で動物のからだなどにくっついて運ばれます。



ミズヒキ

タデ科

道端ややぶの縁などによくみられる一年草です。紅白の花がお祝いで使う水引に似ているので、この名がつけました。花期は7～11月です。20～30cmに伸びた花穂に、まばらに花がつけます。果実の先端がかぎ状に曲がっていて、これで動物のからだなどにくっついて運ばれます。



キンミズヒキ

バラ科

道端や草地を好む一年草です。7～10月に黄色い5弁の花を咲かせます。花のつき方などがミズヒキに似ていることからこの名がつけました。果実の周囲に、先端がかぎ状になった棘がたくさん生えていて、動物のからだなどにくっついて運ばれます。



オオオナモミ

キク科

空き地や道端などでよくみられる一年草です。花期は8～10月で、風媒花です。雌雄同株で、刺のある雌花が集まって下部に咲き、刺の少ない雄花が先端に集まって咲きます。果実にも刺が沢山つき、動物のからだなどにくっついて運ばれます。



イノコズチ

ヒユ科

林内や林縁など、日のあまり当たらない木陰を好む一年草です。茎の節がふくらんでいる所を猪の膝にみたてて「猪子槌」という名がつけました。花期は7～8月で、果実には表面に針状の刺があり、これで動物のからだなどにくっついて運ばれます。



オオブタクサ

キク科

河川敷などに大群落を作る北アメリカ原産の一年草です。戦後帰化して広がり、高さは2～3mに及びます。葉の切れ込みがクワに似て、クワモドキとも呼ばれます。8～9月に花が咲き、風に花粉が運ばれるので、ブタクサとともに花粉症の原因であるとされます。



ヨメナ

キク科

やや湿り気のある道端を好む多年草です。春先の若芽は良い香りがし、菜飯、あえもの、天ぷらなどで楽しめるので、「嫁菜」が転じてこの名がつけました。7～10月に白や紫色の花を咲かせ、果実の冠毛はとても短く、ノコンギクなどと区別ができます。



ホトトギス

ユリ科

日陰を好み、林縁や林床、湿った崖などにみられる多年草です。9～10月に咲く花の斑点が同名の野鳥の胸の模様似ていることから、この名がつけました。徳富蘆花が逗子を舞台にして書いた「不如帰（ほととぎす）」という小説にちなんで、「逗子の花」に指定されています。



ブタクサ

キク科

道端や河川敷などに生える北アメリカ原産の一年草で、明治時代に帰化しました。高さは1mほどで、葉の切れ込みが細かくヨモギに似ています。花期は7～10月で、風に花粉が運ばれるので、花粉症の原因とされます。



シロヨメナ

キク科

林縁などの半日陰を好む多年草で、「ヤマシロギク」とも呼ばれ、ヨメナではなくノコンギクの仲間です。白いヨメナとは、8～11月に咲く花が小ぶりで、果実の冠毛が長くタンポポのような綿毛になることで区別ができます。



ヒガンバナ

ヒガンバナ科

中国から帰化したといわれ、人里にみられる多年草です。冬に葉を出して栄養分を蓄え、秋までは地表に出てきません。9月に花だけ咲かせるので、お彼岸にちなんでこの名がつけました。「曼珠沙華（まんじゅしゃげ：天上の花）」とも呼ばれます。



ピラカンサ

バラ科

常緑低木。枝には多くの刺があり、赤やオレンジ色の実を大量につけます。ピラカンサは属名にもなっている一般的な呼び方で、タチバナモドキや、ヒマラヤトキワサンザシなどが含まれます。



トベラ

トベラ科

常緑低木。葉や樹皮をつぶすと悪臭が出ることから、魔除けとして扉に飾られ、この名が付けられました。緑色の実が熟すと、割れて粘りけのある赤い種子が出てきます。



エノキ

アサ科

落葉高木。街道の一里塚に植えられ、夏には木陰が喜ばれたので、榎の漢字があてられたという説がありますが、名には諸説があります。実は熟すと橙色になり甘みがあります。野鳥が好んで食べます。



カラスウリ

ウリ科

つる性多年草。種子の形が「結び文」に見えます。昔、文を「玉ずさ」といったので、タマズサという別名があります。赤く熟した実はしもやけなどの薬として利用されます。(P.24参照)



ヘクソカズラ

アカネ科

つる性多年草。葉をつぶすと悪臭が出ることからこの名が付けられました。晩秋には枯れ草などに絡みついた黄褐色の実が目立ちます。(P.22参照)



イチヨウ

イチヨウ科

落葉高木、裸子植物です。化石から、ジュラ紀(約2億年前)にも生育していたようなので、生きた化石ともいわれます。雄木と雌木があり、種子には強い臭いがあり、さわるとかぶれることがありますが、中のギナンは殻を割って、食用にされます。

ブナ科の果実 ドングリ表

殻斗（かくと）：一般的にはお椀、お皿、帽子などと呼ばれています。ブナ科の特徴です。

樹種名	葉の様子	実の付き方	実の様子	殻斗の様子	熟す期間
ウバメガシ				うろこ状	2年
コナラ				うろこ状	1年
クヌギ				トゲ状 反り返る	2年
アカガシ				輪状 密毛に覆われる	2年
シラカシ				輪状	1年
アラカシ				輪状	1年
クリ				刺状 裂ける	1年
スタジイ				裂ける	2年
マテバシイ				うろこ状	2年

冬 — 寒さに耐える —

ロゼット状の植物

茎を上方に伸ばさず、地面を這うように葉を放射状に広げた状態の植物をいいます。冬の地面を観察すると、よく見られます。植物が太陽光を効率よく受け止め光合成を盛んにしたり、地面から放出される熱を受け止めたりすることができるのです。ロゼットで過ごすことにより、冬の寒さから身を守り、養分を蓄積して、春に急激な成長と開花を進めることができると考えられます。また、茎が立ち上がらないことにより、人や動物の踏みつけ、刈り込みにも耐えることができます。ロゼット状とは、ローズ（バラの花）の形に似ているという意味です。ここで扱ったロゼット状の植物が、やがてどのような植物体へと成長するのか、春や夏の様子と比べてみましょう。



セイヨウタンポポ キク科
(P.6参照)



ノゲシ キク科
(P.6参照)



オニノゲシ キク科
(P.6参照)



オニタビラコ キク科
(P.7参照)



ハルジオン キク科
(P.7参照)



ヒメジョオン キク科
(P.7参照)



ハマダイコン アブラナ科
(P.8参照)



ナズナ アブラナ科
(P.8参照)



タネツケバナ アブラナ科
(P.9参照)



キュウリグサ ムラサキ科
(P.11参照)



ハハコグサ キク科
(P.11参照)



ウラジロチチコグサ キク科
(P.11参照)



ヒメオドリコソウ シソ科
(P.12参照)



ホトケノザ シソ科
(P.12参照)



コマツヨイグサ アカバナ科
(P.13参照)



ナガミヒナゲシ ケシ科
(P.13参照)



ヒルザキツキミソウ アカバナ科
(P.13参照)



オオバコ オオバコ科
(P.14参照)



トウダイグサ トウダイグサ科
(P.14参照)



ヘビイチゴ バラ科
(P.15参照)



タチツボスミレ スミレ科
(P.16参照)



セイタカアワダチソウ キク科
(P.29参照)



マンリョウ サクラソウ科

常緑低木。漢字名は万両、茎は直立してまばらに枝を出し、葉は波状の鋸歯があります。花は枝先に開花し、実は赤く熟し、垂れ下がってつきます。鳥が好んで食べ、排出された種は発芽しやすくなります。



センリョウ センリョウ科

常緑低木。漢字名は千両。伸びた枝の先端に花穂を伸ばして、開花します。実は赤く熟し、枝先にまとまってつきます。



カラタチバナ サクラソウ科

常緑低木。漢字名は唐橘。茎は直立して、枝は出しません。葉には浅い鋸歯があります。実は赤く熟し、垂れ下がってつきます。マンリョウやセンリョウに対して、百両ともいわれます。



ヤブコウジ サクラソウ科

常緑低木。地下茎を伸ばし繁茂します。茎は立ち上がり、10~20cm、葉には細かい鋸歯があります。葉の脇から花穂を伸ばして開花し、やがて実は赤く熟します。センリョウやマンリョウに対して、十両ともいわれます。



オオアリドオシ アカネ科

常緑低木。小枝を多数出し、葉は対生します。茎には針状の刺があり、アリの突き刺すほど鋭い様子から、この名がつけられました。葉の脇に1~2個の白い花をつけ、実は熟すと赤くなります。縁起を担ぎ、「千両、万両、有り通し(ずっと有る。)」と言われ、センリョウやマンリョウと寄せ植えされることがあります。一両ともいわれます。



マサキ ニシキギ科

常緑低木。潮風や刈り込みにも強く、生け垣などに利用されます。赤く熟した実は割れて、中から橙色の種が現れます。



ナンテン メギ科

常緑低木。葉は羽状の複葉。茎の先に花穂を伸ばして、開花します。実は赤く熟して、垂れ下がり、鳥が好んで食べます。名前の音から「難を転ずる」と読みかえ、縁起木として庭などに植えられます。



アオキ ガリア科

常緑低木、雌雄異株です。日本原産の樹木で、葉には荒い鋸歯があります。枝や葉が年中緑色であることから名付けられました。実は冬の間にも赤く熟して、雌木にのみに見られます。



ヤドリギ ビャクダン科

常緑寄生低木、雌雄異株です。サクラやケヤキなどの落葉広葉樹に寄生して育つことから名付けられました。実を食べた鳥が排出しても、種には粘り気が残ります。この種が樹皮に付着することにより、繁殖します。



ケヤキ ニレ科

落葉高木。山地の明るい斜面に生えています。街路樹としても植えられています。堅く、木目が美しいことから、建築や家具など多方面で使われています。



サザンカ ツバキ科

常緑小高木。細かく枝分かかれし、ツバキより小型の葉を多くつけます。開花した花の花弁はばらばらに落下し、残った子房には細かな毛が生えています。大きく育った実にもそのまま毛が生えているのでツバキと区別がつきます。



ヤブツバキ ツバキ科

常緑高木。海岸近くの丘陵地に自生します。花弁はまとまって落ちます。子房は無毛ですので、実も無毛です。これらのことからサザンカと区別できます。種から油を取り、「椿油」として、利用されます。「逗子市の木」です。



ロウバイ ロウバイ科

落葉低木。1～2月頃、葉がでる前に香りのよい蠟細工のような黄色の花が開花します。花の付け根が肥大成長して、楕円形で壺のような実をつけます。



マンサク マンサク科

落葉小高木。2月頃、枝いっぱいにつけることから満作と名付けたという説がありますが、様々な説があるようです。花びらは4枚で、糸のように細くねじられています。



ジンチョウゲ ジンチョウゲ科

常緑低木、雌雄異株です。3月頃、よい香りのする桃色の花が開花しますが、日本では雄株がほとんどです。最近、赤い実がつく雌株が輸入されたようです。



ヤツデ ウコギ科

常緑低木、海岸近くの暖帯林に生えます。葉が手のひら状で、切れ込みが多いことから八の字をあて、名付けられました。12月頃、白い5弁の小花を球状に咲かせ、実は熟すと黒くなります。



モクレン モクレン科

落葉低木、中国が原産地です。直立した幹をもち、多数の枝を出します。3~4月頃に、外側は暗い紫色、内側は薄紫色の中央が少しくびれた大型の花をつけます。



コブシ モクレン科

落葉高木。3月頃、新葉が出る前に開花します。花は白色で、モクレンより小さく、よい香りがします。実の形が握りこぶしのようなことから名がついたといわれています。



ウメ バラ科

落葉高木、各地で植栽されています。花は品種により白色、赤色、淡紅色、八重など様々で、よい香りを放ちます。梅雨の頃、実は黄色に熟し、果実は梅干しなどに利用します。



ネコヤナギ ヤナギ科

落葉低木、雌雄異株です。ふっくらとした花穂を猫の尾に見立て、名付けられました。葉が育つよりも早く、2~3月頃開花します。

第 2 部

ウォッチング逗子の自然

みなさんは

自分の住んでいる逗子市の自然について
どれくらい知っていますか。

たとえば、ある生き物を観察したいときに
「いつごろ」「どこに」行けばよいのかなど、
けっこう知らないことばかりではないでしょうか。

ここでは、みなさんにもぜひ知ってほしい
逗子の自然について紹介します。



逗子の生き物紹介

1 シダ植物

逗子市には多くのシダ植物が生えています。日本には約700種類のシダ植物があるようですが、逗子市には、その内の100種類ほどが生えています。胞子でふえます。



イノデのなかま

春に出る新しい芽が、まるでイノシの手のようです。



リョウメンシダ

表と裏が同じようので区別しにくいシダです。



コモチシダ

葉の表面にたくさんの芽（無性芽）ができます。



ホウライシダ

観賞用のアジアンタムと同じなかまです。



ジュウモンジシダ

葉の形が十文字のようです。



カニクサ（ツル状のシダです。）



ホシダ



オリヅルシダ



ヤブソテツ



マメツタ



イワガネソウ

2 コケ植物

湿った地上や石垣などにへばりついて群生しています。雄株と雌株があり、孢子でふえます。



オオシノブゴケ



ゼニゴケのなかま



スギゴケのなかま

3 ケイワタバコ (P.24参照)

神武寺境内の入り口の崖にへばりつくようにして生えているので、見たことのある人もいるのではないのでしょうか。日当たりのあまりよくない湿った崖などに生え、夏に紫色の花を咲かせます。沼間中学校の校章は、この花のなかまであるイワタバコをデザイン化したものです。



沼間中学校 校章



4 菌類（キノコ）

逗子市には、キノコの種類も多いようです。特に神武寺周辺の山は、食べられるキノコもありますが、毒のあるキノコもたくさんあります。日本全国では、毎年数百人の人がキノコを食べて中毒になっています。キノコは種類を見分けるのが非常に難しいので、特に気をつけましょう。たとえ図鑑などで調べて、食べられるキノコとよく似ていたとしても、必ず専門家の人に見てもらってください。(P.62「気をつけよう！危険な生物」参照)



テングタケ

灰色から灰褐色のカサの表面に、「ツボ」と呼ばれる白色のイボ状のものがついています。有毒です。



スツポンタケ

かさの部分がべとべととしていて、くさいにおいを放ちます。



ムジナタケ

初夏から秋にかけて、庭先や草地などによく見られます。



ヒメホウキタケ

箒（ほうぎ）状に枝分かれています。あまり大きくありません。



カラカサタケ

30cmほどにもなる大きなキノコです。



カンゾウタケ

切ってみると、まるで生の肉のようです。



ホコリタケ

熟したものを指で押すと、ホコリのような胞子がたくさん出ます。



シロオニタケ

落ちやすいとがったイボに表面がおおわれています。



モミジウロコタケ

広葉樹の表面によく群生しています。モミジの葉のような切れ込みがあります。



マメザヤタケ

形はスリコギ状、ミット状と、変化に富みます。表面全体は黒いですが、中は白っぽいです。



エリマキツチグリ

落ち葉の上に落ちた木の実のようです。



フサタケ

細かく枝分かれをくり返した形になっています。



スエヒロタケ

成長すると毛におおわれた体が、指をいっぱいに広げたように育ちます。



カワラタケ

枯れ木に、びっしりとはえている姿がよく見られます。



アラゲキクラゲ

中華料理などに使うキクラゲのなかまです。

5 土壌動物

土壌動物とは、生活のほとんどを土の中で過ごす動物であり、普段はあまり目にする機会がありません。しかし、落ち葉の下や土の中を掘り返してみると、様々な形をした土壌動物が何種類も見つかります。実際に土壌動物を探してみましょう。

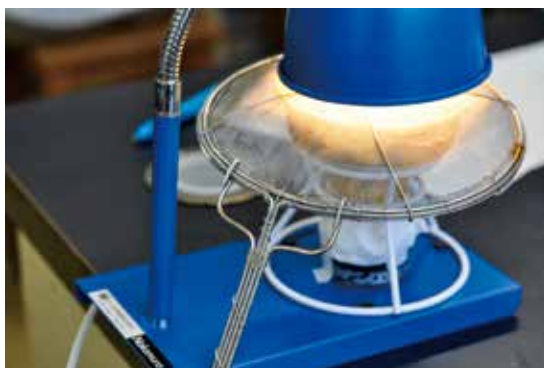
土や落ち葉の中から直接探す方法（ハンドソーティング）

日があまり当たらない湿った土や落ち葉をバットの中に取り、ピンセットや葉さじなどを用いて土壌動物を探します。その中に数種類の土壌動物が混ざっていれば、大きなものを自分で探しながら観察を行うことができます。もっとよく観察をしたい動物を見つけたときは、シャーレに移すことで観察しやすくなります。そのシャーレを冷蔵庫などで冷やすと不活発になり、より観察しやすくなります。また、目的の動物がいなかった場合は、再度土や落ち葉を入れ替えて探します。



ツルグレン装置を使った採取方法

土壌や落ち葉を装置に入れ、電球の照射によって徐々に乾燥させます。自然界では地表面が乾燥すると、十分に湿度のある環境を目指して、土壌動物は下へ進む習性があります。つまり、ほとんどの土壌動物は土を乾燥させると重力の方向へ移動する習性があるので、ツルグレン装置の下部のふるいから下に落ちます。



土壌動物の種類

円盤図表を使って土壌動物を同定してみましょう。



クモのなかま

クモのなかまのほぼ半数の種は、網を張らずに獲物を捕まえます。



ゴキブリのなかま

菌類、樹液、朽ち木、動物の死がいや糞などを食べます。



ゴミムシのなかま

小動物を捕食しますが、新鮮な死肉も食べます。



ハサミムシのなかま

腹部の先端にハサミを備えています。他の昆虫を捕食します。



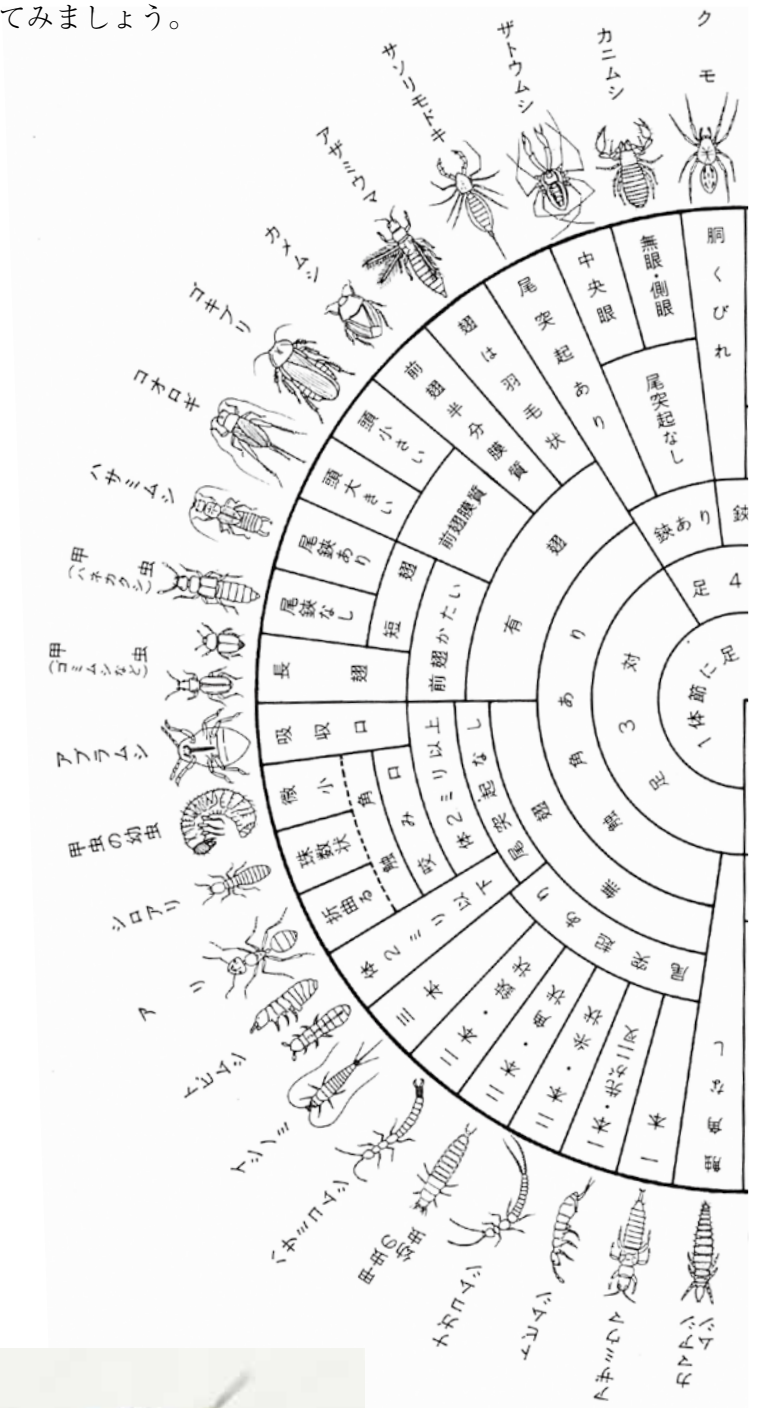
甲虫の幼虫

甲虫が成虫になる前の一般的な姿です。腐葉土などを食べます。



トビムシのなかま

外敵に襲われると、腹部の先端の跳躍器を使って飛び跳ねて逃げます。





ワラジムシ

落ち葉などを食べて分解します。



オカトビムシ

陸生のヨコエビ。本州に広く分布しています。



オオムカデのなかま

夜行性で、昆虫や小動物を捕まえて食べます。



ヤスデのなかま

落ち葉を食べ、触ると嫌な臭いの分泌物を出します。



コウガイビルのなかま

プラナリアなどと同様に再生能力が高く、ミミズなどを捕食します。



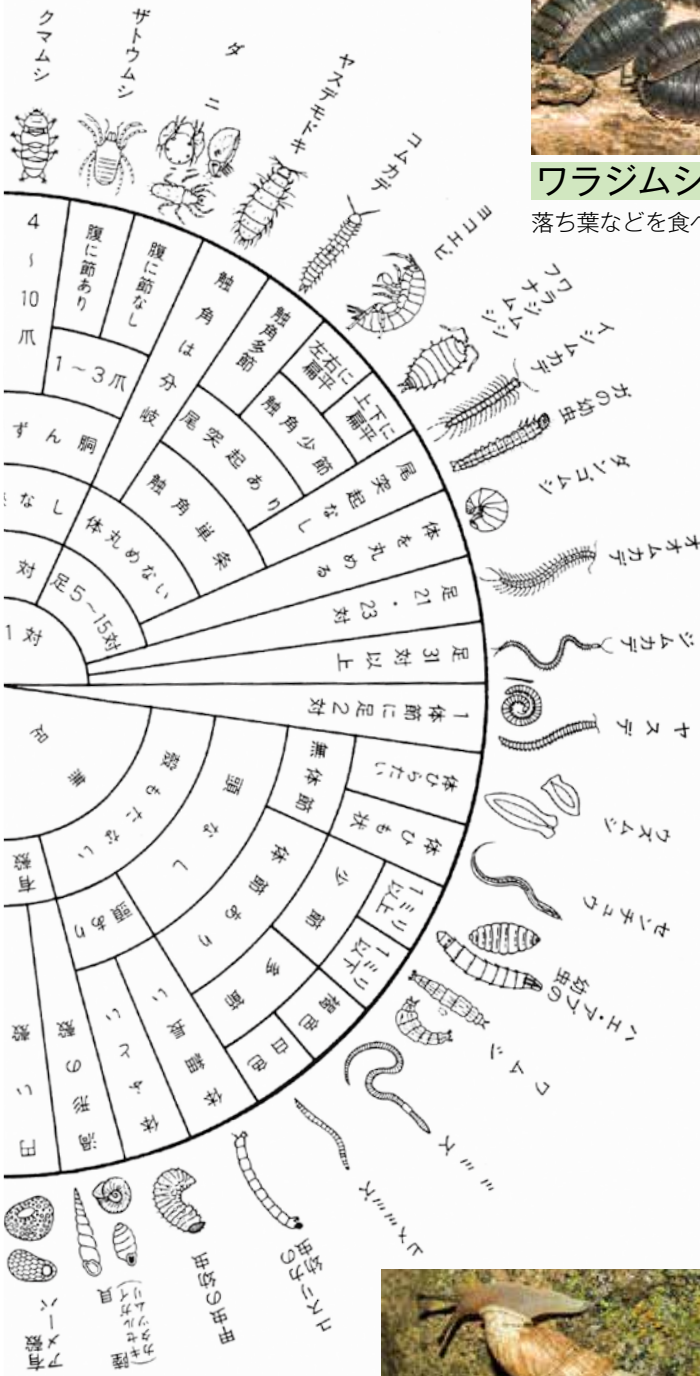
ミミズのなかま

土壌の中の有機物を取り込み排出することで、土を団粒構造にします。



キセルガイのなかま

陸生の貝類で、えら呼吸ではなく肺呼吸を行います。



土壌動物の検索円盤図表 (青木原図FGS指標生物1985思索社版)

6 野鳥

逗子市にはたくさんの鳥たちが住んでいますが、ここでは主に田越川沿いや近くの公園などで見られる鳥をあげてみました。田越川では、潮が引いているときの方が観察しやすいです。



カワセミ

カワセミ科

全長約17cm。「飛ぶ宝石」と呼ばれる青と橙色の美しい鳥です。逗子市では田越川水系や久木大池などで見られます。オスのくちばしは黒く、メスの下くちばしは赤いので、区別できます。
採餌物：小魚、エビ、トンボ



カワウ

ウ科

全長約82cm。オスメス同色です。久木川との合流点では、群れで見られます。似たものに、ウミウがあります。
採餌物：魚



カルガモ

カモ科

全長約60cm。カモ類の中ではこの種だけが、オスメス同色で見分けがつかません。留鳥で、田越川では6月ごろ赤ちゃんが見られます。
採餌物：イネ（葉、種子）、小魚



マガモ

カモ科

全長約59cm。オスは首が黒緑色で、くちばしは黄色、メスは目立たない褐色でくちばしは橙色です。冬鳥としてやって来ます。
採餌物：水草、イネ（種子）、貝



コサギ

サギ科

全長約61cm。逗子市でもっとも普通に見られるシラサギで、シラサギ中最も小さいです。くちばしは黒く（他のサギは冬に黄色くなる）、足指は黄色です。
採餌物：エビ、魚、ザリガニ、貝、水棲昆虫



アオサギ

サギ科

全長約93cm。留鳥で、日本のサギ科の中では最大です。青というよりは灰色のサギです。
採餌物：魚、鳥の雛、ザリガニ、カエル、貝



ゴイサギ サギ科

全長約57.5cm。田越川中流域でよく見られます。幼鳥は褐色の地に淡色の斑紋が散らばるためホシゴイと呼ばれ、まったく別種に見えます。約3年で成鳥になります。

採餌物：魚、カエル、昆虫、クモ、カニ、エビ



ヒヨドリ ヒヨドリ科

全長約27.5cm。オスメス同色です。留鳥で、繁殖期を山で過ごし冬に人里へ降りてきていましたが、最近は市街地でも繁殖するようです。

採餌物：木の実、花の蜜、昆虫



ハシボソガラス カラス科

全長約50cm。ハシブトガラスより小柄で、くちばしは細く、額は出っ張っていません。農耕地、河原などの地上で歩き回って餌をさがしていることが多いです。ガララ、ガララと濁った声で鳴きます。

採餌物：昆虫、木の実、種子、鳥の雛、動物の死骸



ハシブトガラス カラス科

全長約56.5cm。くちばしが太く、額は出っ張っています。市街地、海岸、山地には特にハシボソガラスより多いです。カーカーと澄んだ声で鳴きますが、アーアーと高低を変えた声、ガララと濁った声なども出します。

採餌物：昆虫、木の実、種子、鳥のヒナ、動物の死がい



イソヒヨドリ ツグミ科

全長約25.5cm。写真の上がメス、下がオスです。最近では田越川沿いのほか駅周辺や、沼間などへも生息地を広げつつあるようです。ホイピーチョイチョイ、ツツピーコーなどと、よい声でさえずります。

採餌物：昆虫、トカゲ、フナムシ



スズメ ハタオリドリ科

全長約14.5cm。オスメス同色です。人家の周辺だけに分布し、山奥などには住んでいません。逗子駅の街路樹などでは、群れてねぐらを作ります。

採餌物：昆虫、イネ（葉、花、種子）



ツバメ ツバメ科

全長約17cm。オスメス同色です。夏鳥として渡来し、人家の周辺で巣を作り、電線に止まって休んでいる姿をよく見かけます。巣の材料の土を採るときは、地面のぬかるんでいるところに降りています。

採餌物：飛んでいる虫



メジロ

メジロ科

全長約11.5cm。オスメス同色です。留鳥で、秋冬には山地からも降りてきて、市街地で群れをつくります。昆虫や木の実を食べるほか、先が分かれた舌を伸ばして花の蜜を吸います。

採餌物：昆虫、クモ、花の蜜



ハクセキレイ

セキレイ科

全長約21cm。留鳥で逗子市ではどこでも見られ、校庭などの意外な場所でも巣を作ります。

チュチュン、チュチュンと波状に飛びながら鳴き、早足で地上を走り、止まって尾を上下に振るといふ、特徴的な動作をします。

採餌物：昆虫、クモ



モズ

モズ科

全長約20cm。オスは翼の白斑が目立ち、メスは全体的に茶色っぽいです。秋に枝などに止まってキィー、キィキィキィという高鳴きをするほか、他の鳥の声をまねるなど、多様な鳴き方をします。

採餌物：昆虫、トカゲ、カエル、小型の鳥、ネズミ



ムクドリ

ムクドリ科

全長約24cm。オスメス同色です。地上をのこのこと歩きまわって餌を探す姿をよく見かけます。人家の雨戸の戸袋などにも巣をつくり、リャーリャーとかキュルキュルと鳴きあいます

採餌物：昆虫、木の実、種子



キジバト

ハト科

全長約33cm。オスメス同色です。かつては低地や山地に多く、ヤマバトと呼ばれましたが、最近は市街地でも電線などに止まって、ゼゼッポーポーと鳴いているのをよく見かけます。

採餌物：種子、穀類、豆類



トビ

タカ科

全長オス約59cm、メス約69cm。オスメス同色です。留鳥で、日本のタカ科ではトビだけ、写真のように尾の中央が凹んでいます。

採餌物：ヘビ、魚、ネズミ、動物の死がい、カエル、トカゲ



ツグミ ツグミ科

全長約24cm。オスメス同色です。冬鳥で公園や農耕地などの開けた場所を好み、木の実や土の中の虫を探して食べ、クイツ、クイツと鳴きます。

採餌物：ミミズ、クモ、昆虫、木の実



ジョウビタキ(メス) **ジョウビタキ(オス)**
ヒタキ科

全長約14.5cm。オスは背中が黒で大きな白い紋があり、胸から腹は橙色で目立ちますが、メスは全体的に茶色で地味です。冬鳥で、田越川流域では尾を小刻みに振りながら、ヒツ、ヒツ、と澄んだ声で鳴く姿が見られます。

採餌物：昆虫、木の実



シジュウカラ シジュウカラ科

全長約14.5cm。オスメス同色ですが、胸のネクタイ模様がメスの方は細いです。逗子市でも1年中見ることが出来る鳥です。ツツピー、ツツピー、とよく通る明るい声でさえずります。

採餌物：木の実、種子、昆虫、クモ



ウグイス ウグイス科

全長約15.5cm。オスメス同色です。逗子市では名越緑地や桜山中央公園、蕨花記念公園で見やすいです。ホーホケキョなどとさえずる他に、チャツ、チャツと舌打ちするように地鳴きをします。

採餌物：昆虫、クモ、種子、木の実



コジュケイ キジ科

全長約27cm。オスメス同色です。逗子市でも山地や林などで繁殖しますが、姿を見ることは難しく、普段はチョットコイ、チョットコイと大きく鳴く声だけがよく聞こえます。

採餌物：種子、木の実、クモ、昆虫



コゲラ キツツキ科

全長約15cm。オスメスほぼ同色です。褐色と白のまだらで、ギーときるのように鳴き、木の幹に縦に止まるのが特徴的です。逗子市では近くの公園や人家の近くでも見られます。

採餌物：昆虫、木の実

7 磯の生物

海は月の重力などの影響で、1日に2回の潮の満ち引きをくり返しています。

逗子の海は、逗子海岸の砂地と大崎・小坪の岩礁域とに大別されます。どちらにも多様な生物が生息していますが、特に潮の引いた磯では多くの生物を簡単に観察・採取することができます。ここではそのような磯で見られる生物を中心に紹介していきます。



【海岸の場所の区分について】

海岸の生物の生息場所を表す方法のひとつとして、潮の満ち引きによる区分があります。満潮時の海岸線を満潮線、干潮時の海岸線を干潮線と呼び、海岸をその2つの線で区切ると右図の通り、3つに分けられます。

潮上帯（ちょうじょうたい）

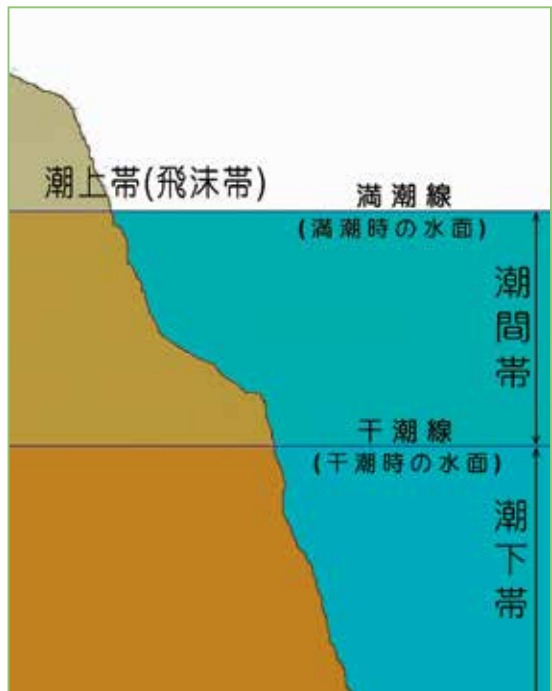
満潮線より上の地帯で、いつも陸上となる部分です。飛沫帯（ひまつたい）とも呼ばれます。ここには乾燥と潮風に耐えられる生物だけが生息しています。

潮間帯（ちょうかんたい）

満潮線と干潮線の間地帯で、1日のうちに陸上になったり海中になったりする部分を潮間帯といいます。生物にとって栄養と太陽光は充分ですが、日射や降水によって塩分濃度や温度が急激に変わり、また強い波にも対応する必要があります。そのため環境の変化に強い生物が多く生息しています。干潮時に海水が残る部分をタイドプール（潮だまり）といい、生物の生活の上では重要となっています。

潮下帯（ちょうかたい）

干潮線より下の地帯で、いつも海中となる部分を潮下帯といいます。生物にとっては安定した環境ですが、干潮線の直下などでは強い波に対応する必要があります。





フナムシ フナムシ科

岩場にはたくさんのフナムシがいます。体長3～5cmで岩の上を時に素早く動き回り、「海のコキブリ」というありがたくないニックネームをもらっています。水の中に入れますが、岩の上に上がれないとおぼれることもあるそうです。海の掃除役をこなしています。採餌物：藻類、生物の死がい。



ヒザラガイ ヒザラガイ科

岩のすき間には多くの生物が付着しています。ヒザラガイは虫のようにも見えますが、どちらも貝のなかまで、素手ではがすことはほとんど不可能です。道具を使ってはがすとくると丸まることから、「海のアルマジロ」とも呼ばれます。マツバガイは笠型の貝殻をもつカサガイの一種で、放射状に入った赤い線が松の葉の広がるように似ていることから、この名がつけました。

採餌物：藻類



マツバガイ ヨメガカサ科



ヒバリガイモドキ イガイ科

ヒバリガイモドキは、殻の長さが2cmほどで、潮間帯の岩礁に集団でくっつく黒褐色の貝です。マガキは真水の影響を受ける内湾で育ち、5～8cmくらいになります。

採餌物：藻類



マガキ イタボガキ科



カメノテ

ミヨウガガイ科



クロフジツボ

クロフジツボ科

カメノテもフジツボも貝のように見えますが、カニやヤドカリのなかまです。岩場に付着して潮が満ちると先端部分が開いて素早く海水中のエサを捕食します。群生していて、素足で踏んだりすると思わぬケガをしますので注意が必要です。

採餌物：プランクトン



ヒライソガニ

イワガニ科



イソガニ

イワガニ科

石の下や岩のすきまにいるカニです。ヒライソガニは甲らの表面が平らで、色彩は様々です。一方のイソガニは甲らがやや山なりになっているほか、緑と黒のまだらの模様をしています。また、イソガニにははさみに斑点があって、足にしま模様があります。

採餌物：海藻、魚や貝の死がい



ホンヤドカリ

ホンヤドカリ科



ダイダイイソカイメンのなかま

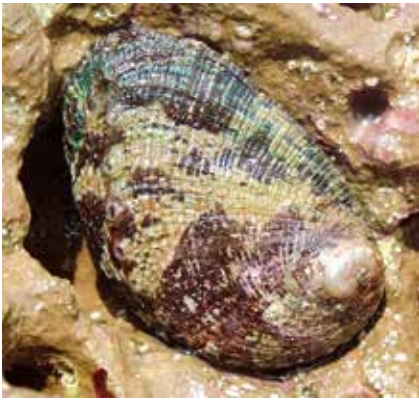
イソカイメン科

巻貝の中からだを入れて歩くヤドカリ。ホンヤドカリは足の先端部分が白くなっています。タイドプールなどに多くみられます。からだの成長とともに大きな貝に住みかえて生活します。

採餌物：プランクトン、藻類、動物の死がい

潮間帯の岩をよく観察してみると、黄色や橙色が目立つ存在です。植物と勘違いされがちですが、海綿動物に分類される動物です。このなかまには養殖されて、スポンジとして商品化されているものもあるそうです。いろいろな種類のダイダイイソカイメンがいます。

採餌物：プランクトン



トコブシ ミミガイ科

巻貝のなかまで、アワビの近縁種です。岩のすき間や裏側に付着していますが、夜間にはエサをとるためにはいまわります。無断で採取すると処罰の対象となりますので、注意が必要です。



イシダタミガイ ニシキウズ科

北海道から沖縄、香港、シンガポールまでの潮間帯に比較的普通に見られる巻貝のなかまで、煮たり焼いたりして食べられます。
採餌物：海藻、魚や貝の死がい



アオウミウシ イロウミウシ科

よく名称を間違えられるのがウミウシとアメフラシです。アオウミウシは青い色に黄色の斑点があります。大きさは3~5cmと大きくありませんが、アメフラシは二枚貝のなかまで、30cmを超えるものもあります。刺激すると紫色の液を出すのも、アメフラシの特徴です。
採餌物：海藻



アメフラシ アメフラシ科



オオツノヒラムシ ツノヒラムシ科

淡水にすんでいるプラナリアと同じ、扁形動物のなかまでです。からだは紙のようにうすく平たく、3対の触角があります。日本各地の海の岸近くにいます。似たものに触角が1対のツノヒラムシがいます。
採餌物：貝



ミスガイ ミスガイ科

岩礁域付近の砂地や砂だまりなどにすむ、ウミウシのなかまでです。貝殻は卵型で細い茶褐色の線の模様があります。からだがかたく発達し、貝殻の中には納まりきれていません。
採餌物：藻類



イソスジエビ テナガエビ科



スジエビモドキ テナガエビ科

タイドプールにも多くみられる、からだが見え透った小さなエビです。からだの黒いしま模様が多く、腹側にままでのびていて、額角（頭の先端部分）の先の部分が上をむいて曲がっているのがイソスジエビです。
採餌物：小魚や貝などの死がい、水棲昆虫、水草



ドロメ ハゼ科



アゴハゼ ハゼ科

タイドプールや浅い岩礁域に多く生息するハゼのなかまです。よく似ているので区別が付きにくいのですが、ドロメの方が体色がやや濃く、体長もアゴハゼが7~8cmなのに対して13cmくらいにまで成長することで、区別できます。
採餌物：プランクトン



イシガニ ガザミ科



ガザミ ガザミ科

どちらもガザミ科に属し、食用にされています。特にガザミは水産業のうえで重要種となっています。ガザミの方が甲らがひし形に近く、区別することができます。また、ガザミの方が大きくなるのも特徴のひとつです。
採餌物：小魚、エビ、カニ、ゴカイ



ユビナガスジエビ テナガエビ科

スジエビモドキによく似ていますが、スジエビモドキには腹部にスジがあることで見分けられます。ユビナガスジエビは色が黒っぽくなり、背中に線の入るものもいます。塩分の薄い内湾にすんでいるエビです。地域によっては、佃煮にして食用にします。採餌物：エビ、貝、ミミズ、小魚、動物の死がい



イソテッポウエビ テッポウエビ科

はさみの片方が大きく、そのはさみで大きな音を出します。岩の間や石の下などに生息していて、巣穴をつくっていますが、その巣穴をハゼのなかまと『共生』していることが広く知られています。採餌物：藻類、小魚



ナベカ イソギンポ科

浅い岩礁域やタイドプールで黄色の体が目立つナベカは、岩穴などにおいて岩や石の上を歩くように進み、少し進んでは立ち止ってキョロキョロしている姿がかわいい魚です。夏近くにオオヘビガイの殻などに産卵し、その卵は雄が見守り続ける魚です。採餌物：プランクトン、藻類、貝



イトマキヒトデ イトマキヒトデ科

磯でよく見られる、カラフルなヒトデです。腕が短く、「糸巻き」のような形からこの名がつけました。肉食性で、ウニや貝、魚などを食べますが、その時は口から胃袋を外に出して消化します。採餌物：ウニ、貝、魚



ヨツバモガニ クモガニ科

タイドプールをよく観察してみると、海藻のようなものが何やら動いていたりします。その正体はイソクズガニやヨツバモガニで、甲らなどに付着物をつけてカモフラージュしているのです。ハサミで器用に付着させている姿を見ることもできます。採餌物：藻類、プランクトン、ヤドカリ



ニホンクモヒトデ クシノハクモヒトデ科

五角形をしたからだから細長い腕がのびているヒトデです。岩礁域や石が多い浜に生息していますが、見つかりと意外に素早く逃げ出して石の下などに隠れてしまいます。このなかまは5本の腕を持っています。採餌物：エビ、カニ、プランクトン、動物の死がい



バフンウニ オオバフンウニ科

食用にするウニのなかまですが、ムラサキウニはバフンウニよりもトゲが長く全体的に黒っぽい色をしています。ともに岩の穴や石の下などにすむ。

採餌物：海藻



ムラサキウニ ナガウニ科



ミドリイソギンチャク ウメボシイソギンチャク科

潮間帯の中部から潮下帯に生息します。砂や小石などがたまった岩の割れ目などにくっついていて、体の部分は砂に埋まっていて見えないことが多いようです。触手の色はピンク色のものが多く、黄緑色のものもあります。体の色は黒っぽいものから赤っぽいものまでありますが、体のイボ(吸着疣)だけは、必ず緑色になっています。

採餌物：小魚、プランクトン



ミズクラゲ ミズクラゲ科

肉厚な感じで傘の直径が15cmくらいのクラゲです。海岸などで打ち上げられたものを見たことのある人も多いことでしょう。体の95%以上が水といわれ、水から出ると干からびてしまうそうです。4つの生殖腺と胃が透けて見えるところから、別名を四つ目クラゲといっています。

採餌物：プランクトン



マダコ マダコ科

食べてもおいしいマダコですが、見ていて飽きない生物でもあります。危険が迫るとスミをはいて逃げます。8本の足にある吸盤でいろいろなものに吸い付き、なかなか取れません。歯も鋭いので、採集には気をつけたいものです。

採餌物：貝、カニ、エビ



ケマンガイ マルスダレガイ科

殻の長さが3~4cmの砂底にすむ貝で、ハマグリに似た卵円形をしています。逆V字形の細い溝が多数刻まれていて、茶色の網目状の模様がみられます。

採餌物：プランクトン



オヤビッチャ スズメダイ科

夏になるとタイドプールにも、小さなオヤビッチャがたくさん泳いでいるのを目にするようになります。背の部分が黄色く、黒い横じまが5本入っている魚で、20cmくらいまで成長します。

採餌物：プランクトン、藻類



シマスズメダイ スズメダイ科

からだ全体は銀白色で、背の部分が黒っぽくなっています。また尾の付け根には黒い斑紋がみられ、横じまがあるのも特徴です。タイドプールにオヤビッチャなどと一緒に泳いでいることも多くあります。

採餌物：プランクトン、藻類



クサフグ フグ科

5月の連休頃から、波打ち際に群れで集まり産卵します。夏にはとても小さなクサフグが、タイドプールなどにもみられます。クサフグは砂にもぐって、目だけがキョロキョロ動いたりして、そのすがたがユーモラスです。

採餌物：小魚、エビ、カニ、貝、ヒラムシ



キヌバリ ハゼ科

岩礁域や砂泥底に生息し、薄いピンク色の魚体に黒い横じまが6本みられます。しかし宮城県以北と日本海では7本あります。キヌバリの近縁種にリュウグウハゼがいますが、こちらは中層を泳ぎ、海底に定着していないことが多い魚です。

採餌物：プランクトン、魚の卵



チョウチョウウオ チョウチョウウオ科

通称『ナミチョウ』と呼ばれています。黒潮によって日本近海に到達しますが冬を越せずに死んでしまうため、チョウチョウウオのような魚は死滅回遊魚と呼ばれています。

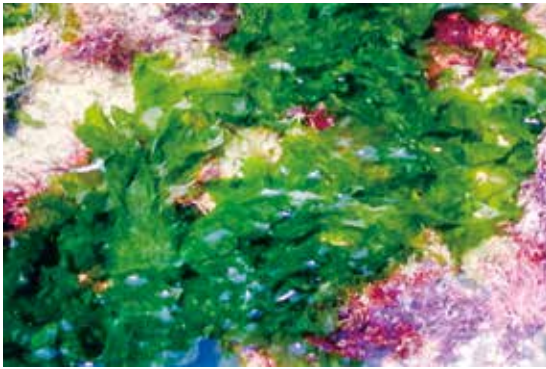
採餌物：プランクトン



ニザダイ ニザダイ科

尾びれの付け根に黒い斑紋があり、そのうち3つがよく目立つことから『サンノジ』と呼ばれます。幼魚はタイドプールの岩の下などでもみられます。大きくなると60cm以上にもなるようで、成魚になると群れをつくって生活します。

採餌物：藻類、カニ、エビ



アナアオサ 緑藻類

春から夏にかけて生育します。生長につれてからだに穴がたくさんあきます。おいしそうに見えますが、意外とかたいです。



ミル 緑藻類

春から夏に生育します。二又の分岐をくり返し、全体が松の木のように広がります。フェルトの布のような手触りで、漢字の名前では海松と書き、海松色(みるいろ)はこの種の深緑色を指します。



ウミウチワ 褐藻類

からだは扇状で厚く、まさしくうちわのようです。革のような手ざわりがします。生長するにつれて縦の裂け目がたくさんでき、破れうちわのようになります。



フクロフノリ 褐藻類

からだは球形の袋状で、薄くて破れやすいです。岩の上だけでなく、ホンダワラ類などの海藻上にも生育します。



ネバリモ 褐藻類

からだは球形でやわらかく、つぶすとバラバラになります。粘り気があるといわれますが、同じなかまのフクロフノリと見分けにくいです。



ヒジキ 褐藻類

冬から春に成体となり、岩の上をおおいつくすほどの大きな群落をつくります。食用ですがタンニンが多く含まれ、よく煮ないと渋いです。



ワカメ 褐藻類

冬から春に見られます。葉のように広がったからだに中軸があるのがワカメの特徴です。「めかぶ」と呼ばれるのは、胞子をつくる生殖器官で、葉状部の下にできます。



アラメ 褐藻類

長く太い茎を持ち多年生です。中軸が枝分かれしているのが特徴で、葉の表面にはしわがあり、でこぼこしています。大きな群落をつくり、水生動物のよい生息場所となります。食用にすることもあります。



アカモク 褐藻類

日本全土の浅海に分布します。一年生で、秋から冬に生長し、4～7mの長さには達します。食用になり、ミネラルをはじめ、食物繊維やポリフェノール、フコイダンが非常に多く含まれています。

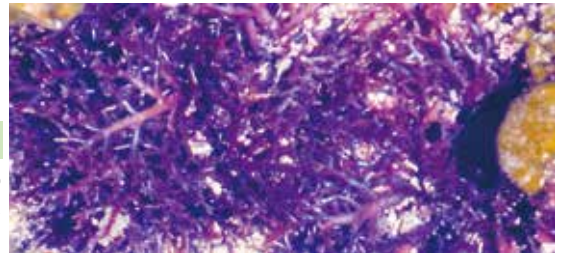


カジメ 褐藻類

長く太い茎を持ち多年生です。葉の表面はしわがなく、つるつるしています。アラメより深いところ（水深10mくらいまで）に大きな群落をつくり、水生動物のよい生息場所となります。

スギノリ 紅藻類

葉の先がとがって杉に似ているということから、この名がつけました。からだは柔らかく、黒っぽい色をしています。水中では青い蛍光色を発します。



石灰藻のなかま

潮間帯の岩の上をピンク色におおっている海藻です。丈は約10cmと短く、かたくバリバリしています。石灰を含んでいるので、総称して石灰藻とも呼ばれます。

カニノテ 紅藻類



フサカニノテ 紅藻類



海藻

アマモ 種子植物

砂地に群落をつくる種子植物なので、海藻ではなく海草です。地下茎でも増える多年草で、5～6月には花が咲き、実をつけます。アマモ場は、砂地の水生動物の生息場所として重要なはたらきをしています。



気をつけよう！ 危険な生物



スベスベマンジュウガニ オウギガニ科

岩の穴の中などに隠れすんでいて、あまり外に出てきません。甲らは茶色の模様で光沢があり、丸みのある形をしています。肉や内蔵にサキシトキシンやテトロドトキシンという毒があり、食べると死に至る場合もあるそうです。



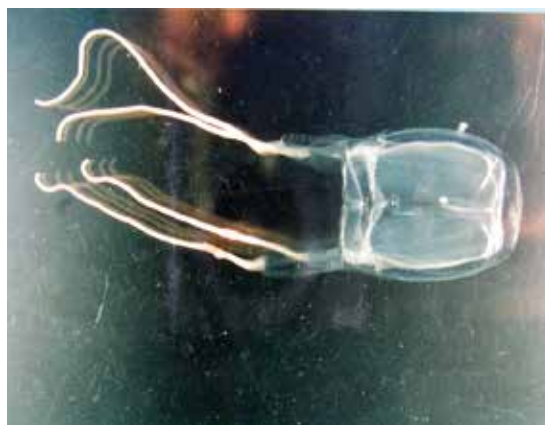
ゴンズイ ゴンズイ科

「海のナマズ」と呼ばれる、あいきょうのある顔をしています。背びれと胸びれに毒があり、刺されると激しい痛みとともに赤く大きな腫れがおこります。



ハオコゼ ハオコゼ科

背びれに毒があり、刺されるとかなりの痛みがあります。タイドプールにいることもあり、魚体に触れないように気をつけましょう。釣りをしていると、よく釣れてくる魚でもあります。



アンドンクラゲ アンドンクラゲ科

無色透明の15~20cmほどのクラゲです。1年中いますが、足が一番伸びる8月が最も見つけやすい時期です。足のように見える触手に毒があり、刺されると湿疹や腫れが出ます。

生物とふれあうのはとても大切なことですが、逗子市にいるような身近な生物でも、毒のあるものがたくさんいます。ですから、気をつけないと痛い思いをしたり、ときには命にかかわるような危険な目にあったりすることもあります。



マムシ

牙に毒があります。



チャドクガの幼虫

毛に毒があります。



ヒメスズメバチ

おしりの針に毒があります。



ヤマトリカブト キンポウケ科

全体に毒があります。



トウダイグサ

トウダイグサ科

全体に毒があります。(P.14, 35参照)



カバキコマチグモ

牙に毒があります。



ヤマカガシ

奥歯と首の付け根に毒があります。



オオスズメバチ

ヒメスズメバチより大きく、おしりの針に毒があります。



クロシタアオイラガの幼虫

とげに毒があります。



ヤマハゼ

ウルシ科

全体に毒があります。汁がふれただけでも皮膚炎を起こします。



タケニグサ

ケシ科

全体に毒があります。



ヨウシュヤマゴボウ

ヤマゴボウ科

全体に毒があります。ブドウと似ているので注意してください。



ウラシマソウ

サトイモ科

全体に毒があります。(P.17参照)



キョウチクトウ

キョウチクトウ科

全体に毒があります。

■この他にも、キノコのなかま (52ページ) など、まだまだたくさんの「危険な生物」がいます。野外で生物の観察や採集をするときには、じゅうぶんに気をつけてください。

自然の状態を示す生物

逗子市でも、自然が年々減ってきているように思います。次にあげるような自然の状態を示す生物がいます。そのなかには指標生物と呼ばれているものもあります。これらの生物を調べることによって、自然が残されている度合い（自然度）を知る手がかりとなります。

1 「外来生物」と「在来生物」の植物

本来は日本にはいないはずなのに、何らかの理由で日本に入ってきて野生化した生物のことを「外来生物」といいます。開発などで人間の手が加わって、環境が不安定になっているところでは、外来生物の植物の割合が多くなっているようです。みんなのまわりの植物の中で、外来生物が占める割合を調べてみましょう。



セイヨウタンポポ（外来生物）

(P.6参照)



カントウタンポポ（昔から日本にあるタンポポ）

(P.6参照)



そうほうへん
総包片がそり
かえっている

◀ 区別のしかた ▶



総包片がそり
かえていない

最近では、セイヨウタンポポとカントウタンポポがかけ合わさってできたハイブリッドな個体も見られるようになってきました。みなさんのまわりに咲いているタンポポは、どの種類でしょうか。ぜひ調べてみましょう（似ている植物もあるので注意しましょう）。

2 そのほかの外来生物

[植物]

外来生物とはいっても、もうすっかり日本の土地になじんでしまっている感じのものもありますね。

(北アメリカより)



セイタカアワダチソウ キク科
(P.29参照)

(北アメリカより)



ニワゼキショウ アヤメ科
(P.10参照)

(北アメリカより)



ハルジオン キク科
(P.7参照)

(西アジアより)



オオイヌノフグリ オオバコ科
(P.11参照)

(ヨーロッパより)



ヒメオドリコソウ シソ科
(P.12参照)

(ヨーロッパより)



シロツメクサ マメ科
(P.12参照)

(ヨーロッパより)



ナガミヒナゲシ ケシ科
(P.13参照)

[動物]

動物の世界でも、外国から入ってきて野生化した外来生物がいます。そのような動物が増えてくると、本来の日本の自然が失われてしまうことになります。



ウシガエル

大正時代にアメリカから食用として持ち込まれ、ほぼ全国で野生化してしまいました。まるで牛のような声で鳴きます。大きなものは、20cmくらいになります。



クリハラリス（台湾リス）

もともとは台湾の動物です。飼育動物として日本に持ち込まれ、それが逃げ出して野生化してしまいました。ドングリや木の葉、花などを食べるため、樹木の多い環境でよく見つかります。群れで生活し、独特な声でにぎやかに鳴き交わします。電線を伝い歩く姿を見かけることもよくあります。



アメリカザリガニ

ウシガエルのエサとして一緒に持ち込まれました。今ではどこでも見られるような動物になってしまいました。



ガビチョウ

チメドリ科

中国南部に生息する鳥です。日本ではペットとして飼われていたものが、逃げ出したか放鳥されたかして、野生化したようです。近年逗子市内でも増えてきました。よく通る大きな声でさえずるので注意を引きますが、鳥の姿を見つげられず、どんな鳥かと話題になります。ウグイスやシジュウカラなどの鳴き真似もしますが、大きな鳴き声なので区別が出来ます。



ミシシippアカミミガメ

飼育動物として持ち込まれたものが逃げ出し、野生化しました。顔の横の赤い模様が名前の由来になっています。甲羅は黄色や黒の縞模様が入ることが特徴的です。繁殖力が強く、在来のカメや水生生物に悪い影響を及ぼしています。

■ 外来生物は他にもまだまだたくさんいます。

興味のある人は調べてみましょう。



オオクチバス（ブラックバス）

釣りを楽しむために湖や池に放されました。

*これらの外来生物は、本来日本にいた動物たちを押しよけてしまったり、食べてしまったりするものが多いので、大きな問題になっています。

3 水生生物

川の中にある生物の種類と数を調べることによって、その川の水がきれいか汚いかを知ることができます。

きれいな川にいる生物



カゲロウの幼虫



カワゲラの幼虫



ヘビトンボの幼虫



サワガニ

汚い川にいる生物



イトミミズ



ユスリカの幼虫



サカマキガイ

ハブタエモノアライガイ

■みんなの家の周りの川には、どんな生物がいるでしょうか。

地質データ

三浦半島の成り立ち

横須賀市自然・人文博物館 2012 よこすか大地と生命の歴史 ー特別展示解説書11ー より



約500万年前の三浦半島周辺の復元図

Ms:三崎層, Hy:葉山層群, Zs:逗子層.

時代	Ma (百万年前)	北帯	中帯	南帯	凝灰岩層/火成岩類	年代 Ma (文献)	
第四紀	更新世	沖積層・埋め立て地					
		関東ローム				On-Pm1	0.1 (9)
		小原台砂礫層 Ob		小原台砂礫層 Ob		(御岳第1テフラ)	
		賀横層須 Yk	走水礫層 Hr	大津砂泥部層 Ot	宮田層 My	Hk-TAu12 (箱根多摩Au12)	0.147±0.009 (8)
		上総層群 Kz				Kd38	1.73~1.45 (7)
第三紀	鮮新世	池子層 lkn	KGP		KGP	2.43 (6)	
		三浦層群	逗子層 Zs	三浦層群	初声層 Hs	Hk 4.1±0.6 (5)	
	中新世	三浦層群	逗子層 Zs	三浦層群	三崎層 Ms	So 4.7±0.16 (3)	
			三浦層群	三浦層群	三崎層 Ms	Ok 6.3±0.4 (4)	
						Mk 9.90±0.10 (3)	
古第三紀	漸新世		矢部層 Yb				
			葉山層群 Hy				
古第三紀	始新世				安山岩 Sr	19.5±0.7 (2)	
					安山岩 An		
					玄武岩 Ba	玄武岩 50~40 (1)	



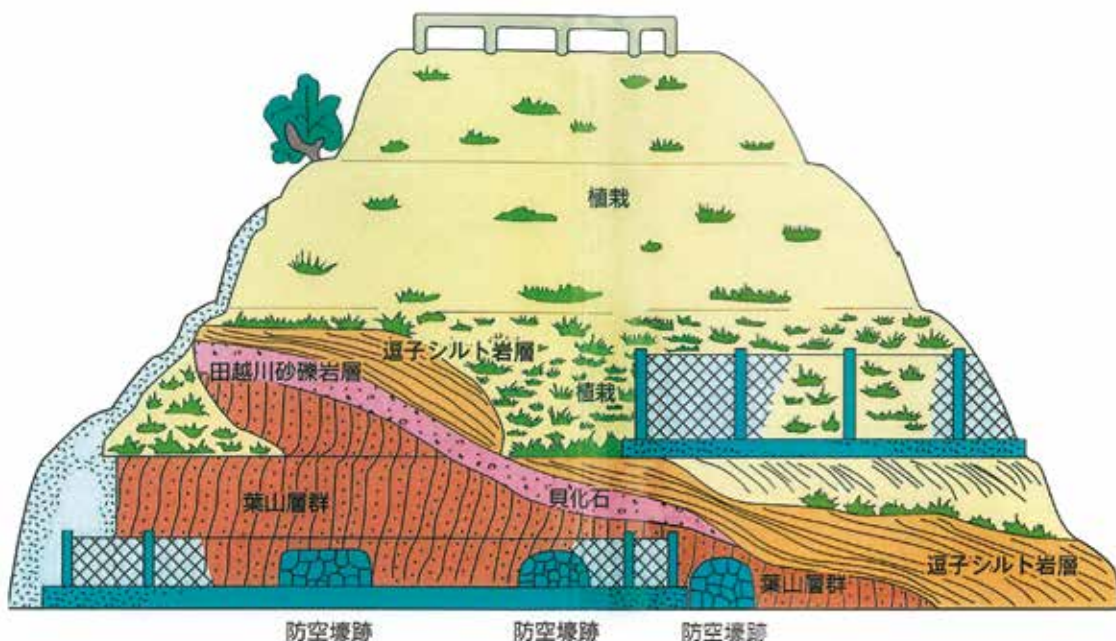
三浦半島南帯, 中帯(葉山帯), 北帯の区分

文献 (1) Kaneoka et al. (1982), (2) 今永・山下 (1999), (3) 柴田ほか (2008), (4) Kasuya (1987)
 (5) Saito et al. (1997), (6) 山下 (1996), (7) 藤岡ほか (2003), (8) 鈴木 (1976)
 (9) 町田・新井 (2003)

あぶずり ふうせいごう ろとう 燈摺の不整合を示す露頭

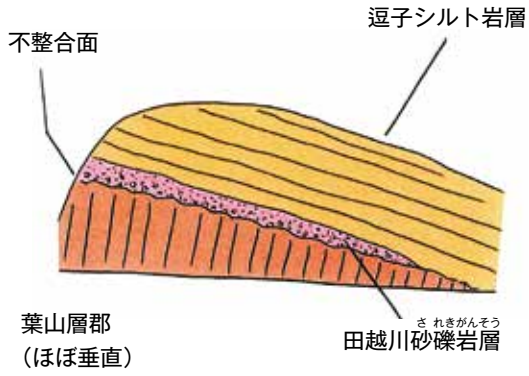
神奈川県指定天然記念物
(昭和52年5月20日 指定)

この崖^{がけ}の下の方にある葉山層群ができた時代と上の方にある三浦層群ができた時代との間には、数百万年の時間の不連続があり、その間に大規模な地殻変動^{だいきぼ ちかくへんどう}があったと考えられています。このような関係のことを不整合^{ふせいごう}と呼んでいます。



※逗子市浄水管理センターには、同じような不整合を示す露頭が保存されています。(市の天然記念物) 見学したい場合は、あらかじめ管理センターに許可をもらってからにしてください。

この露頭の模式図



※田越川砂礫岩層からは、ミウラニシキ・ズシミノガイなどの二枚貝化石などが見つっています。

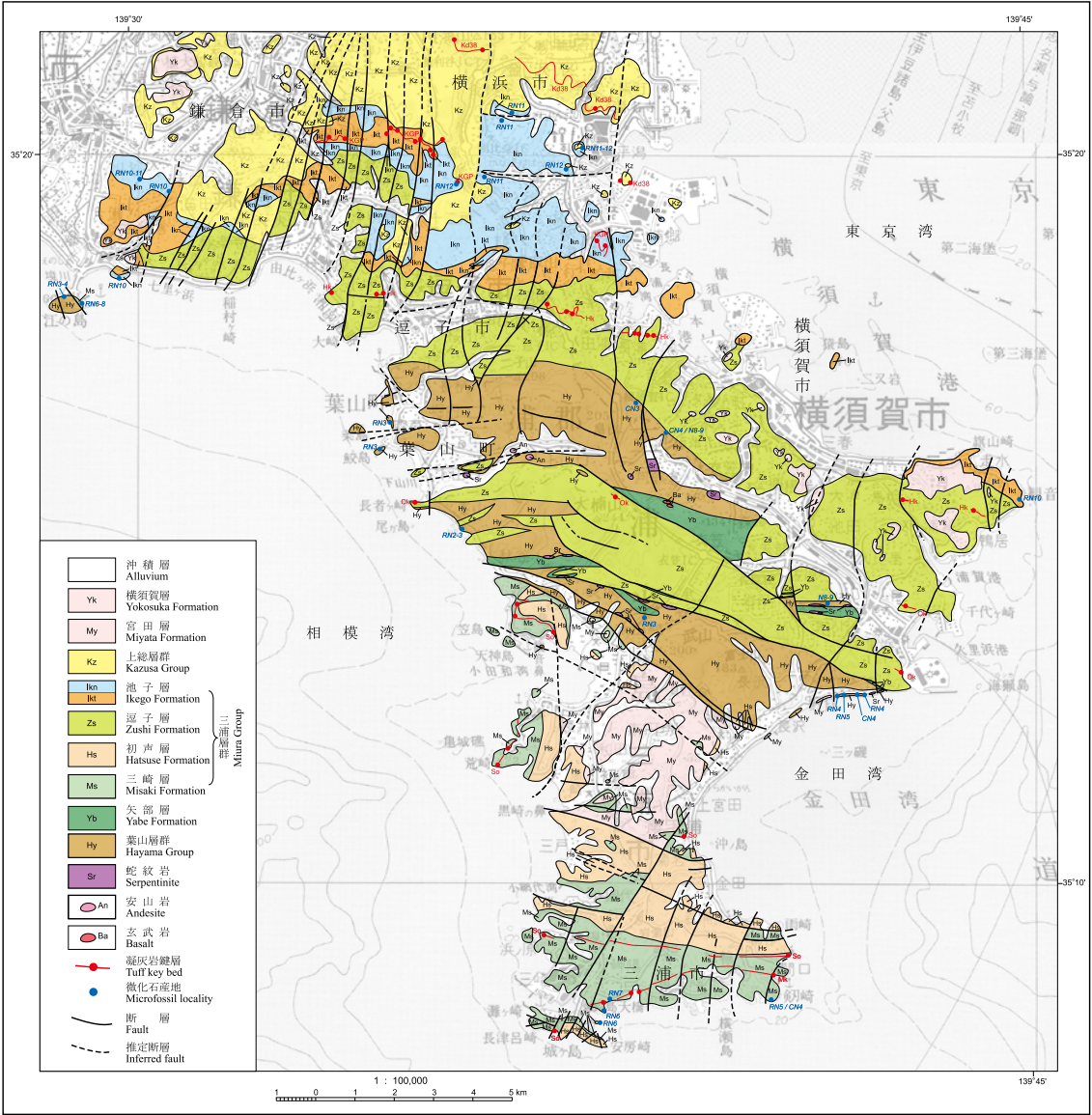


田越川砂礫岩層



三浦半島地質図 Geological Map of the Miura Peninsula

横須賀市(2012)を改変, 蟹江康光原図



この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分の1地勢図を複製したものである。(承認番号 平24開復、第22号)

逗子の年間の天気の変化

逗子市は、温暖な気候と言えます。夏は海からの涼しい風が吹き、冬は海からの暖かい風が吹き、まわりの丘陵地で北風が入りにくいからです。

また、雨もほどよく降り、水にも恵まれています。

2014～2019年の気象状況

2014年の気象状況

	天候		風向		風速(m/s)		気温(℃)			湿度(%)			気圧(hPa)			降雨量(mm)	降雨日数
	最多	最多	最高	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均				
1月	晴	北東	21.7	2.7	15.3	-2.3	6.2	88.6	11.6	46.8	1028.1	999.7	1016.5	36.0	4		
2月	晴	北東	23.5	2.8	17.5	-1.1	5.5	96.9	17.4	52.6	1029.6	997.7	1017.1	49.5	6		
3月	晴	北東	27.7	3.0	20.1	-2.5	9.7	88.6	10.5	54.1	1029.6	985.3	1013.4	121.0	7		
4月	晴	北東	18.5	2.3	21.7	2.0	13.5	89.4	12.2	59.7	1027.9	989.4	1014.9	200.0	10		
5月	晴	北西	25.8	2.7	26.6	9.9	18.5	89.1	12.2	65.5	1022.4	991.4	1009.8	105.0	8		
6月	晴	北西	15.5	2.1	28.5	17.3	21.9	88.8	27.4	74.3	1014.6	990.5	1006.1	284.5	11		
7月	曇	北西	18.6	2.2	35.0	19.7	25.2	88.8	38.6	73.7	1016.5	988.8	1007.9	28.0	9		
8月	晴	北西	23.7	3.4	31.8	19.4	25.9	88.3	45.0	74.2	1015.4	996.4	1009.3	102.5	10		
9月	晴	北東	20.3	2.3	30.8	16.1	22.4	89.1	25.0	66.3	1022.2	999.4	1011.5	71.0	8		
10月	晴	北東	36.0	2.2	28.5	10.8	18.2	96.3	23.8	67.5	1028.0	974.6	1016.4	299.0	10		
11月	晴	北東	21.0	2.4	22.1	4.4	13.7	90.2	22.4	63.0	1027.4	997.7	1016.6	61.5	10		
12月	晴	北東	23.1	2.8	19.8	-2.1	7.3	94.4	13.0	54.1	1030.2	990.0	1012.8	98.0	6		
年間	晴	北東	36.0	2.6	35.0	-2.5	15.7	96.9	10.5	62.7	1030.2	974.6	1012.7	1456.0	99		

2015年の気象状況

	天候		風向		風速(m/s)		気温(℃)			湿度(%)			気圧(hPa)			降雨量(mm)	降雨日数
	最多	最多	最高	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均				
1月	晴	北東	25.3	2.3	16.4	-4.1	5.8	90.8	13.8	52.3	1029.1	992.0	1013.8	99.5	9		
2月	晴	北東	22.3	2.4	18.5	-1.9	6.3	90.2	12.4	55.3	1066.2	800.1	1013.9	45.5	9		
3月	晴	北東	21.6	3.1	20.0	-0.1	10.3	89.7	12.5	57.2	1031.0	992.4	1015.5	122.0	13		
4月	曇	北東	21.1	3.3	22.1	3.1	14.1	91.6	27.7	70.2	1030.3	998.5	1015.7	95.0	12		
5月	晴	北西	28.4	2.8	28.7	8.9	19.7	93.8	14.7	67.2	1023.2	997.0	1008.8	50.5	6		
6月	晴	北西	14.8	1.9	27.8	13.7	21.1	92.4	24.7	75.3	1019.7	993.7	1007.6	126.5	14		
7月	晴	南西	24.4	2.9	32.7	18.6	25.2	97.7	55.0	82.9	1016.2	989.2	1008.7	306.5	15		
8月	晴	南西	16.7	2.6	33.8	17.8	26.3	97.7	48.3	84.1	1014.9	998.9	1008.3	92.5	7		
9月	晴	北東	17.4	2.1	29.5	16.3	22.6	98.3	22.2	83.9	1022.8	1001.6	1011.2	401.5	17		
10月	晴	北東	26.1	2.3	26.8	10.1	18.4	98.0	21.1	74.4	1024.1	995.3	1014.3	33.5	6		
11月	晴	北東	21.0	2.3	23.0	2.9	14.2	98.6	23.0	81.4	1032.6	1002.8	1019.9	117.0	14		
12月	晴	北東	27.6	2.6	22.7	0.7	9.9	98.6	25.5	67.8	1033.8	989.4	1018.0	98.0	8		
年間	晴	北東	28.4	2.5	33.8	-4.1	16.2	98.6	12.4	71.1	1065.2	800.1	1013.0	1588.0	130		

2016年の気象状況

	天候	風向	風速(m/s)		気温(°C)			湿度(%)			気圧(hPa)			降雨量 (mm)	降雨日数
	最多	最多	最高	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均		
1月	晴	北東	24.5	2.2	16.8	-5.2	6.3	98.0	13.0	66.8	1026.2	988.1	1014.9	62.5	4
2月	晴	北東	30.6	2.7	21.3	-0.4	7.6	98.0	15.5	65.4	1032.9	993.5	1017.5	64.5	7
3月	晴	北東	17.4	2.6	19.4	0.7	10.3	98.3	17.5	71.4	1032.3	1000.7	1017.6	157.5	11
4月	晴	南西	30.2	2.8	22.8	5.8	15.4	98.3	17.2	77.3	1026.3	992.1	1012.6	152.0	12
5月	晴	南西	23.6	3.0	26.9	10.7	19.3	98.3	25.8	78.4	1024.3	997.5	1012.5	103.5	8
6月	晴	南西	22.3	2.1	28.8	13.4	21.7	98.3	19.9	84.5	1016.5	995.9	1008.5	126.0	14
7月	晴	南西	18.2	2.2	32.4	19.6	24.7	98.3	51.6	88.0	1020.8	993.0	1009.1	122.0	5
8月	晴	北東	30.9	2.6	33.8	20.9	26.9	98.0	44.9	84.6	1010.7	981.9	1004.0	211.0	10
9月	曇	北東	16.0	2.2	31.5	18.0	24.4	98.6	44.9	90.8	1020.9	998.5	1012.4	241.0	14
10月	晴	北東	24.9	2.2	29.6	9.8	19.0	98.6	36.9	80.2	1028.1	1001.7	1016.4	45.5	9
11月	晴	北東	14.0	2.2	22.1	0.7	11.8	98.8	28.6	77.4	1032.4	1004.5	1017.8	136.5	14
12月	晴	北東	29.1	2.4	20.5	-0.9	9.4	98.8	26.6	68.9	1030.6	994.9	1016.9	53.5	8
年間	晴	北東	30.9	2.4	33.8	-5.2	16.4	98.8	13.0	77.8	1032.9	981.9	1013.4	1475.5	116

2017年の気象状況

	天候	風向	風速(m/s)		気温(°C)			湿度(%)			気圧(hPa)			降雨量 (mm)	降雨日数
	最多	最多	最高	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均		
1月	晴	北東	22.2	2.4	18.7	-3.3	6.3	98.6	12.7	59.9	1028.8	996.4	1014.0	25.5	3
2月	晴	北東	32.1	2.6	18.2	-2.9	7.3	98.6	13.6	57.3	1027.0	991.7	1013.0	14.0	5
3月	晴	北東	15.7	2.2	16.9	-0.7	8.4	98.6	15.0	68.1	1024.4	998.0	1013.2	95.5	9
4月	晴	南西	21.1	3.0	23.6	4.5	14.1	98.6	16.3	76.9	1027.6	988.1	1011.9	111.0	10
5月	晴	南西	20.1	2.3	26.8	11.0	19.2	98.3	24.9	81.8	1027.6	1001.1	1011.5	76.0	4
6月	曇	南西	23.6	2.3	27.7	14.3	21.3	98.3	29.7	82.3	1019.8	989.7	1007.5	150.0	11
7月	晴	南西	17.8	2.8	32.2	21.3	26.2	98.3	55.8	89.2	1013.6	999.1	1008.3	90.5	5
8月	曇	北東	18.4	2.3	35.7	20.4	26.2	98.3	55.2	89.8	1016.7	987.7	1006.6	197.5	13
9月	曇	北東	32.8	2.2	31.4	16.4	22.7	98.6	44.4	85.6	1021.7	990.4	1010.5	310.5	14
10月	晴	北東	25.9	2.5	29.5	9.2	17.2	98.6	32.5	85.4	1028.9	964.4	1017.0	457.5	17
11月	晴	北東	22.4	2.4	22.7	2.8	12.9	98.6	29.7	74.6	1027.3	998.7	1016.3	72.5	8
12月	晴	北東	24.4	2.3	16.5	-1.8	7.2	98.6	21.3	67.4	1026.2	993.1	1015.1	23.0	3
年間	晴	北東	32.8	2.5	35.7	-3.3	15.8	98.6	12.7	76.6	1028.9	964.4	1012.1	1623.5	102

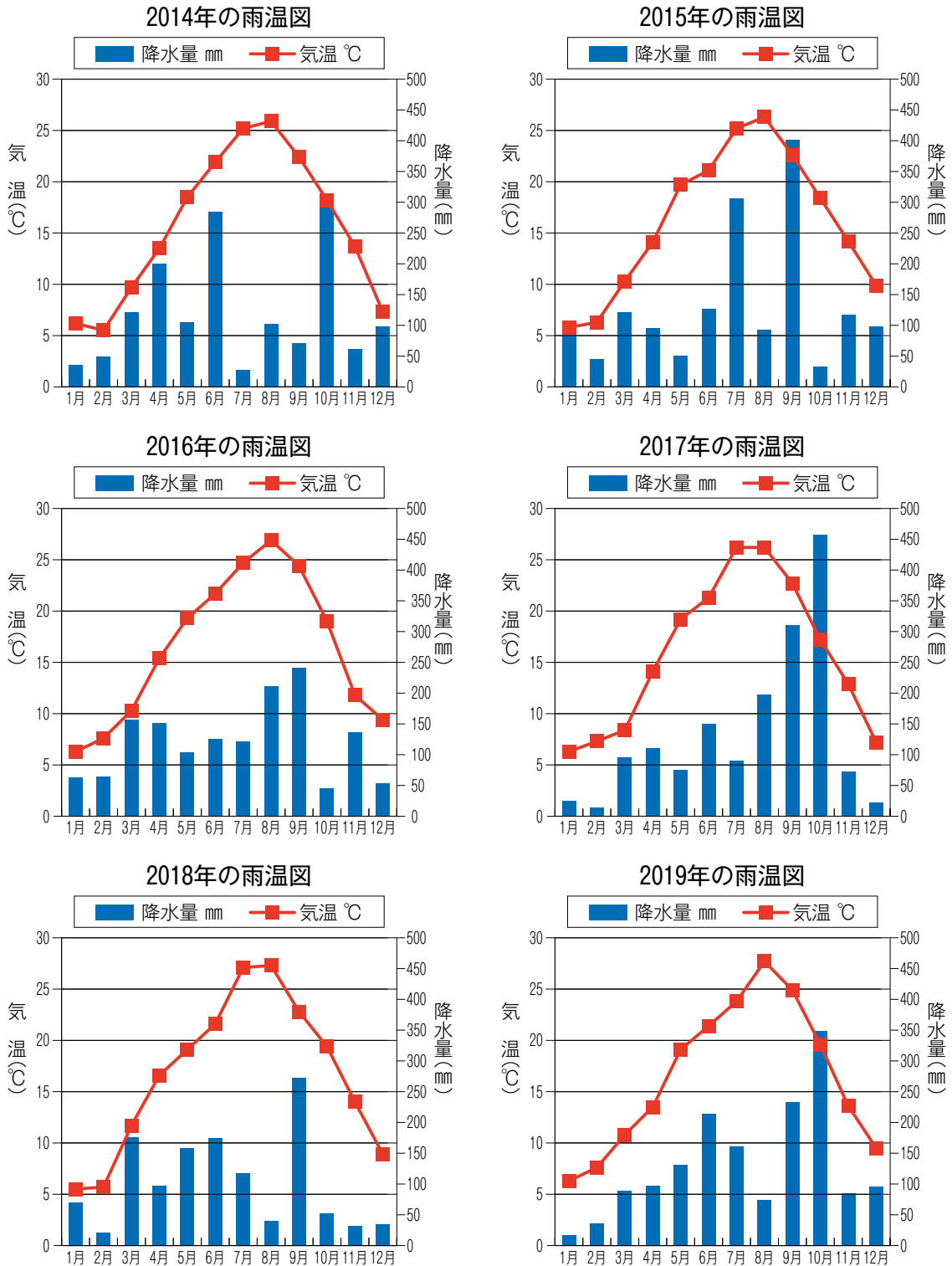
2018年の気象状況

	天候	風向	風速(m/s)		気温(°C)			湿度(%)			気圧(hPa)			降雨量(mm)	降雨日数
	最多	最多	最高	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均		
1月	晴	北東	25.9	2.7	16.3	-5.2	5.5	98.6	15.0	62.9	1029.4	990.3	1013.1	70.5	6
2月	晴	北東	20.6	2.6	15.8	-3.6	5.7	98.3	20.2	64.7	1026.2	999.0	1015.5	20.5	5
3月	晴	北東	24.4	3.2	21.4	0.8	11.7	98.6	23.0	75.4	1034.1	985.5	1015.8	175.5	11
4月	晴	南西	28.7	3.2	24.2	4.7	16.6	98.3	18.6	77.2	1025.2	994.1	1013.4	97.5	9
5月	晴	南西	24.7	3.1	26.3	8.1	19.1	98.3	22.4	81.9	1020.6	997.3	1010.6	159.0	11
6月	晴	南西	20.9	2.7	28.7	14.8	21.6	98.6	37.7	89.2	1019.4	989.9	1008.5	175.0	13
7月	晴	南西	22.0	3.1	34.6	20.5	27.1	98.3	49.9	89.4	1019.9	993.1	1009.7	118.0	6
8月	晴	南西	20.8	3.0	34.1	17.4	27.3	98.3	28.0	87.4	1015.6	993.1	1008.0	40.0	8
9月	曇	北東	26.9	2.6	30.0	13.2	22.8	98.8	28.0	91.0	1023.2	983.4	1012.6	273.0	17
10月	晴	北東	39.3	2.6	30.0	10.1	19.4	98.6	32.7	80.0	1026.9	979.4	1014.6	52.0	10
11月	晴	北東	13.6	1.9	24.0	5.2	14.0	98.6	36.1	80.7	1026.1	1005.5	1018.6	32.5	12
12月	晴	北東	18.6	2.2	22.2	-1.7	8.9	98.6	21.3	69.4	1031.2	1001.8	1017.5	34.0	7
年間	晴	北東	39.3	2.7	34.6	-5.2	16.6	98.8	15.0	79.1	1034.1	979.4	1013.2	1247.5	115

2019年の気象状況

	天候	風向	風速(m/s)		気温(°C)			湿度(%)			気圧(hPa)			降雨量(mm)	降雨日数
	最多	最多	最高	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均		
1月	晴	北東	24.3	2.3	14.7	-0.9	6.3	97.7	18.6	57.9	1029.3	999.3	1015.2	16.5	3
2月	曇	北東	23.6	2.7	19.1	-1.7	7.6	98.6	26.9	67.2	1027.5	1000.8	1016.7	35.5	8
3月	晴	北東	25.6	3.0	21.0	-0.4	10.8	98.6	19.1	68.3	1026.2	990.5	1011.9	89.5	11
4月	晴	北東	23.2	2.6	23.1	2.5	13.5	98.6	14.9	71.2	1023.6	998.3	1012.1	97.0	10
5月	晴	南西	20.1	2.3	28.1	8.2	19.1	98.6	26.1	78.4	1023.7	997.6	1012.3	131.0	10
6月	曇	南西	21.3	2.4	29.9	14.1	21.4	98.6	35.0	88.7	1017.7	986.1	1006.6	214.5	13
7月	曇	南西	21.2	2.4	31.2	17.9	23.8	98.6	64.1	93.4	1015.4	999.6	1008.6	160.5	20
8月	晴	南西	19.2	2.7	34.0	22.6	27.7	98.3	56.9	89.5	1014.6	997.1	1008.0	74.0	7
9月	晴	北東	36.8	2.4	33.3	18.3	24.9	98.6	46.3	86.1	1026.9	964.9	1014.0	232.5	9
10月	晴	北東	33.6	2.6	29.6	11.6	19.6	99.1	33.3	86.3	1027.6	966.5	1014.8	349.0	16
11月	晴	北東	23.1	2.5	22.6	1.6	13.6	99.1	30.8	77.2	1032.5	1003.7	1017.0	85.0	11
12月	晴	北東	24.2	2.3	20.4	0.8	9.5	99.4	29.7	75.0	1029.9	994.6	1018.3	96.0	9
年間	晴	北東	36.8	2.5	34.0	-1.7	16.5	99.4	14.9	78.3	1032.5	964.9	1012.9	1581.0	127

2014～2019年における逗子市の各月平均気温、平均降雨量を用いた雨温図



雨温図などのグラフを書くことで、気象要素のデータを見やすくすることができます。例えば、逗子市では毎年、9月～10月の降水量が多いことがここから見て取れます。

索

引

動 . . . 動物

植 . . . 植物

菌 . . . 菌類

動	アオウミウシ (軟体動物)	55	植	イヌタデ (タデ科)	29
植	アオキ (ガリア科)	36	植	イヌピワ (クワ科)	27
動	アオサギ (サギ科)	48	植	イヌワラビ (シダ植物)	15
植	アカガシ (ブナ科)	33	植	イノコズチ (ヒユ科)	30
植	アカカタバミ (カタバミ科)	10	植	イノデのなかま (シダ植物)	40
植	アカモク (褐藻類)	61	植	イモカタバミ (カタバミ科)	10
植	アキノエノコログサ (イネ科)	28	植	イロハカエデ (ムクロジ科)	18
植	アケビ (アケビ科)	17	植	イワガネソウ (シダ植物)	41
動	アゴハゼ (魚類)	56	動	ウグイス (ウグイス科)	51
植	アジサイ (アジサイ科)	26	動	ウシガエル (両生類)	67
植	アナアオサ (緑藻類)	60	植	ウシハコベ (ナデシコ科)	9
植	アブラナ (アブラナ科)	8	植	ウツギ (アジサイ科)	25
植	アマモ (種子植物)	61	植	ウバメガシ (ブナ科)	33
動	アメフラシ (軟体動物)	55	植	ウミウチワ (褐藻類)	60
動	アメリカザリガニ (甲殻類)	67	植	ウメ (バラ科)	38
植	アラカシ (ブナ科)	33	植	ウラシマソウ (サトイモ科)	17, 64
菌	アラゲキクラゲ (キノコ)	44	植	ウラジロチチコグサ (キク科)	11, 35
植	アラメ (褐藻類)	61	植	エゴノキ (エゴノキ科)	26
動	アンドククラゲ (刺胞動物)	62	植	エノキ (アサ科)	32
動	イシガニ (甲殻類)	56	植	エノコログサ (イネ科)	28
動	イシダタミガイ (軟体動物)	55	菌	エリマキツチグリ (キノコ)	44
動	イソガニ (甲殻類)	54	植	オオアリドオシ (アカネ科)	36
動	イソスジエビ (甲殻類)	56	植	オオイヌノフグリ (オオバコ科)	11, 66
動	イソテッポウエビ (甲殻類)	57	植	オオオナモミ (キク科)	30
動	イソヒヨドリ (ツグミ科)	49	動	オオクチバス (魚類)	68
植	イタドリ (タデ科)	21	植	オオシノブゴケ (コケ植物)	41
植	イタビカズラ (クワ科)	22	動	オオスズメバチ (昆虫類)	63
植	イチヨウ (イチヨウ科)	32	動	オオツノヒラムシ (扁形動物)	55
動	イトマキヒトデ (棘皮動物)	57	植	オオバコ (オオバコ科)	14, 35
動	イトミミズ (環形動物)	68	植	オオブタクサ (キク科)	31
植	イヌガラシ (アブラナ科)	20	動	オオムカデのなかま (多足類)	47

動	オカトビムシ (甲殻類)	47	植	キュウリグサ (ムラサキ科)	11, 34
植	オカトラノオ (サクラソウ科)	24	植	ギョウギシバ (イネ科)	21
植	オニタピラコ (キク科)	7, 34	植	キョウチクトウ (キョウチクトウ科)	64
植	オニノゲシ (キク科)	6, 34	植	キンエノコログサ (イネ科)	28
植	オヒシバ (イネ科)	21	植	キンミズヒキ (バラ科)	30
動	オヤビッチャ (魚類)	59	植	クサギ (クマツヅラ科)	26
植	オランダガラシ (アブラナ科)	15	動	クサフグ (魚類)	59
植	オランダミミナグサ (ナデシコ科)	9	植	クズ (マメ科)	29
植	オリヅルシダ (シダ植物)	40	植	クヌギ (ブナ科)	33
植	カキドオシ (シソ科)	10	動	クモのなかま (クモ類)	46
植	ガクアジサイ (アジサイ科)	26	植	クリ (ブナ科)	33
動	カゲロウの幼虫 (昆虫類)	68	動	クリハラリス (哺乳類)	67
動	ガザミ (甲殻類)	56	動	クロシタアオイラガの幼虫 (昆虫類)	64
植	カジメ (褐藻類)	61	動	クロフジツボ (甲殻類)	54
植	カタバミ (カタバミ科)	10	植	ケイワタバコ (イワタバコ科)	24, 41
植	カニクサ (シダ植物)	40	植	ケキツネノボタン (キンボウゲ科)	13
植	カニノテ (紅藻類)	61	動	ケマンガイ (軟体動物)	58
動	カバキコマチグモ (クモ類)	63	植	ケヤキ (ニレ科)	37
動	ガビチョウ (チメドリ科)	67	植	ゲンノショウコ (フウロソウ科)	24
動	カメノテ (甲殻類)	54	動	ゴイサギ (サギ科)	49
菌	カラカサタケ (キノコ)	43	動	コウガイビルのなかま (扁形動物)	47
植	カラスウリ (ウリ科)	24, 32	動	甲虫の幼虫 (昆虫類)	46
植	カラスノエンドウ (マメ科)	12	植	コガマ (ガマ科)	28
植	カラタチバナ (サクラソウ科)	36	動	ゴキブリのなかま (昆虫類)	46
動	カルガモ (カモ科)	48	動	コゲラ (キツツキ科)	51
動	カワウ (ウ科)	48	動	コサギ (サギ科)	48
動	カワゲラの幼虫 (昆虫類)	68	動	コジュケイ (キジ科)	51
動	カワセミ (カワセミ科)	48	植	コセندگانサ (キク科)	30
菌	カワラタケ (キノコ)	44	植	コナラ (ブナ科)	33
菌	カンゾウタケ (キノコ)	43	植	コヒルガオ (ヒルガオ科)	22
植	カントウタンポポ (キク科)	6, 65	植	コブシ (モクレン科)	38
植	ギシギシ (タデ科)	20	植	コマツヨイグサ (アカバナ科)	13, 35
動	キジバト (ハト科)	50	動	ゴミムシのなかま (昆虫類)	46
動	キセルガイのなかま (軟体動物)	47	植	コメツブツメクサ (マメ科)	20
植	キツタ (ウコギ科)	23	植	コモチシダ (シダ植物)	40
動	キヌバリ (魚類)	59	動	ゴンズイ (魚類)	62
植	キブシ (キブシ科)	19	動	サカマキガイ (軟体動物)	68

植	サザンカ (ツバキ科)	37	動	台湾リス (哺乳類)	67
動	サワガニ (甲殻類)	68	植	タケニグサ (ケシ科)	64
植	ジシバリ (キク科)	6	植	タチイヌノフグリ (オオバコ科) . . .	11
動	シジュウカラ (シジュウカラ科) . . .	51	植	タチツボスミレ (スミレ科) . . .	16, 35
動	シマスズメダイ (魚類)	59	植	タネツケバナ (アブラナ科)	9, 34
植	シャガ (アヤメ科)	16	植	タブノキ (クスノキ科)	19
植	ジュウモンジシダ (シダ植物)	40	植	タマアジサイ (アジサイ科)	26
動	ジョウビタキ (ヒタキ科)	51	植	チカラシバ (イネ科)	28
植	シラカシ (ブナ科)	33	動	チャドクガの幼虫 (昆虫類)	63
菌	シロオニタケ (キノコ)	43	動	チョウチョウウオ (魚類)	59
植	シロダモ (クスノキ科)	19	動	ツグミ (ツグミ科)	51
植	シロツメクサ (マメ科)	12, 66	植	ツタ (ブドウ科)	23
植	シロヨメナ (キク科)	31	動	ツバメ (ツバメ科)	49
植	ジンチョウゲ (ジンチョウゲ科) . . .	38	植	ツメクサ (ナデシコ科)	13
植	スイカズラ (スイカズラ科)	22	植	ツユクサ (ツユクサ科)	25
植	スイレン (スイレン科)	22	植	ツルニチニチソウ (キョウチクトウ科)	24
菌	スエヒロタケ (キノコ)	44	植	ツワブキ (キク科)	14
植	スギ (ヒノキ科)	18	植	テイカカズラ (キョウチクトウ科) . .	23
植	スギゴケのなかま (コケ植物)	41	菌	テングタケ (キノコ)	42
植	スギナ (シダ植物)	15	植	トウダイグサ (トウダイグサ科) . . .	14, 35, 63
植	スギノリ (紅藻類)	61	植	トキワツユクサ (ツユクサ科)	16
動	スジエビモドキ (甲殻類)	56	植	ドクダミ (ドクダミ科)	25
植	ススキ (イネ科)	28	動	トコブシ (軟体動物)	55
動	スズメ (ハタオリドリ科)	49	動	トビ (タカ科)	50
植	スズメノカタビラ (イネ科)	14	動	トビムシのなかま (節足動物)	46
植	スタジイ (ブナ科)	19, 33	植	トベラ (トベラ科)	32
菌	スッポンタケ (キノコ)	42	動	ドロメ (魚類)	56
動	スベスベマンジュウガニ (甲殻類) . .	62	植	ナガミヒナゲシ (ケシ科)	13, 35, 66
植	セイタカアワダチソウ (キク科) . . .	29, 35, 66	植	ナズナ (アブラナ科)	8, 34
植	セイヨウキツタ (ウコギ科)	23	植	ナツグミ (グミ科)	27
植	セイヨウタンポポ (キク科)	6, 34, 65	動	ナベカ (魚類)	57
植	ゼニゴケのなかま (コケ植物)	41	植	ナンテン (メギ科)	36
植	セリ (セリ科)	15	動	ニザダイ (魚類)	59
植	ゼンマイ (シダ植物)	15	動	ニホンクモヒトデ (棘皮動物)	57
植	センリョウ (センリョウ科)	36	植	ニリンソウ (キンポウゲ科)	17
植	ソメイヨシノ (バラ科)	18	植	ニワゼキショウ (アヤメ科)	10, 66
動	ダイダイイソカイメンのなかま (海綿動物)	54	植	ヌスビトハギ (マメ科)	30

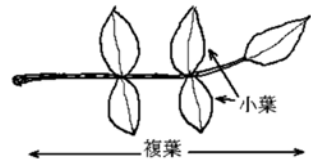
植	ネコヤナギ (ヤナギ科)	38
植	ネジバナ (ラン科)	20
植	ネバリモ (褐藻類)	60
植	ノゲシ (キク科)	6, 34
植	ノシラン (クサスギカズラ科)	25
植	ノブドウ (ブドウ科)	23
動	ハオコゼ (魚類)	62
植	ハキダメギク (キク科)	7
動	ハクセキレイ (セキレイ科)	50
植	ハコネウツギ (スイカズラ科)	18
植	ハコベ (ナデシコ科)	9
動	ハサミムシのなかま (昆虫類)	46
動	ハシプトガラス (カラス科)	49
動	ハシボソガラス (カラス科)	49
植	ハス (ハス科)	22
植	ハハコグサ (キク科)	11, 35
動	ハブタエモノアライガイ (軟体動物)	68
動	パフンウニ (棘皮動物)	58
植	ハマダイコン (アブラナ科)	8, 34
植	ハマヒルガオ (ヒルガオ科)	20
植	ハマボッサ (サクラソウ科)	20
植	ハルジオン (キク科)	7, 34, 66
植	ヒガンバナ (ヒガンバナ科)	31
動	ヒザラガイ (軟体動物)	53
植	ヒジキ (褐藻類)	60
動	ヒバリガイモドキ (軟体動物)	53
植	ヒメウス (キンボウゲ科)	16
植	ヒメオドリコソウ (シソ科)	12, 35, 66
植	ヒメコウゾ (クワ科)	27
植	ヒメジョオン (キク科)	7, 21, 34
動	ヒメスズメバチ (昆虫類)	63
植	ヒメツルソバ (タデ科)	29
菌	ヒメホウキタケ (キノコ)	42
動	ヒヨドリ (ヒヨドリ科)	49
動	ヒライソガニ (甲殻類)	54
植	ピラカンサ (バラ科)	32
植	ヒルザキツキミソウ (アカバナ科)	13, 35


植	フキ (キク科)	14
植	フクロノリ (褐藻類)	60
植	フサカニノテ (紅藻類)	61
菌	フサタケ (キノコ)	44
植	フジ (マメ科)	17
植	ブタクサ (キク科)	31
植	ブタナ (キク科)	21
動	フナムシ (甲殻類)	53
動	ブラックバス (魚類)	68
植	ヘクソカズラ (アカネ科)	22, 32
植	ヘビイチゴ (バラ科)	15, 35
動	ヘビトンボの幼虫 (昆虫類)	68
植	ホウチャクソウ (イヌサフラン科)	16
植	ホウライシダ (シダ植物)	40
菌	ホコリタケ (キノコ)	43
植	ホシダ (シダ植物)	40
植	ホタルブクロ (キキョウ科)	24
植	ホトケノザ (シソ科)	12, 35
植	ホトトギス (ユリ科)	31
動	ホンヤドカリ (甲殻類)	54
動	マガキ (軟体動物)	53
動	マガモ (カモ科)	48
植	マサキ (ニシキギ科)	36
動	マダコ (軟体動物)	58
動	マツバガイ (軟体動物)	53
植	マテバシイ (ブナ科)	33
植	ママコノシリヌグイ (タデ科)	29
動	マムシ (爬虫類)	63
植	マムシグサ (サトイモ科)	17
植	マメグンバイナズナ (アブラナ科)	8
菌	マメザヤタケ (キノコ)	44
植	マメヅタ (シダ植物)	41
植	マンサク (マンサク科)	37
植	マンリョウ (サクラソウ科)	36
動	ミシシッピアカミミガメ (爬虫類)	67
動	ミスガイ (軟体動物)	55
植	ミズキ (ミズキ科)	26

動	ミズクラゲ (刺胞動物)	58	植	ヤブソテツ (シダ植物)	41
植	ミズヒキ (タデ科)	30	植	ヤブツバキ (ツバキ科)	37
植	ミゾソバ (タデ科)	29	植	ヤブニッケイ (クスノキ科)	19
動	ミドリイソギンチャク (刺胞動物)	58	動	ヤマカガシ (爬虫類)	63
動	ミミズのなかま (環形動物)	47	植	ヤマグワ (クワ科)	27
植	ミル (緑藻類)	60	植	ヤマザクラ (バラ科)	18
動	ムクドリ (ムクドリ科)	50	植	ヤマトリカブト (キンポウゲ科)	63
菌	ムジナタケ (キノコ)	42	植	ヤマハゼ (ウルシ科)	64
動	ムラサキウニ (棘皮動物)	58	植	ヤマブキ (バラ科)	16
植	ムラサキカタバミ (カタバミ科)	10	植	ヤマユリ (ユリ科)	25
植	ムラサキケマン (ケシ科)	12	植	ユウゲショウ (アカバナ科)	13
植	ムラサキハナナ (アブラナ科)	8	植	ユキノシタ (ユキノシタ科)	25
動	メジロ (メジロ科)	50	動	ユスリカの幼虫 (昆虫類)	68
植	メヒシバ (イネ科)	21	動	ユピナガスジエビ (甲殻類)	57
植	モクレン (モクレン科)	38	植	ヨウシュヤマゴボウ (ヤマゴボウ科)	64
動	モズ (モズ科)	50	動	ヨツバモガニ (甲殻類)	57
菌	モミジウロコタケ (キノコ)	43	植	ヨメナ (キク科)	31
植	ヤエムグラ (アカネ科)	14	植	ヨモギ (キク科)	7
動	ヤスデのなかま (多足類)	47	植	リョウメンシダ (シダ植物)	40
植	ヤツデ (ウコギ科)	38	植	ロウバイ (ロウバイ科)	37
植	ヤドリギ (ビャクダン科)	37	植	ワカメ (褐藻類)	61
植	ヤブガラシ (ブドウ科)	23	動	ワラジムシ (甲殻類)	47
植	ヤブコウジ (サクラソウ科)	36			

用語解説

用語	解説
1 一年草 <small>いちねんそう</small>	春に発芽して、夏から秋に開花し実をつけ、冬までに枯れて種子を残す草です。
2 越年草 <small>えつねんそう</small>	一年草の中で特に、秋に発芽して冬に葉で過ごし、春には開花し実をつけ、夏までに枯れて種子を残す草をいいます。
3 塊根 <small>かいこん</small>	養分を蓄えて肥大した根のことです。
4 花冠 <small>かかん</small>	花の部分の呼び名で、花卉全体をまとめていうときに使います。
5 花茎 <small>かけい</small>	花を支える茎のことです。
6 花穂 <small>かすい</small>	穂のような形で小形の花が多数ついて咲く様子（花序）をいいます。
7 果囊 <small>かのう</small>	ビワやイチジクなどのように、球状部分の内側に花が咲いたものを花囊（かのう）、果実になったものを果囊といいます。
8 花被片 <small>かひへん</small>	花のつくりで、花びらとがくの区別がつかない場合の花の部分の呼び方です。
9 花柄 <small>かへい</small>	一つの花を支える柄の部分の呼び方です。
10 気根 <small>きこん</small>	地上の茎から出た根のことで、呼吸をするほか、空気中の水分を吸収したり、余分な水分を放出したりします。
11 極相林 <small>きょくそうりん</small>	その地域の気候条件に最も適した樹木から成り立つ森林。森林の中では日がさえぎられてしまうため、暗い環境でも育つ樹木が中心となります。
12 鋸歯 <small>きよし</small>	植物の葉の縁にある、ギザギザの部分のことです。
13 採餌物 <small>さいじぶつ</small>	動物が採って食べるもののこと。
14 雌雄異株 <small>しゆういしゆ</small>	雄花と雌花とがそれぞれ別の株についているものをいいます。
15 小穂 <small>しょうすい</small>	イネ科の花の付き方に見られるように、小花が複数個穂状についている部分をいいます。
16 小葉 <small>しょうよう</small>	複葉についている葉の1枚1枚をいいます。
17 常緑樹 <small>じょうりよくじゆ</small>	1年中緑の葉をつけている樹木を常緑樹といいます。それに対して、低温や乾燥が続く時期にすべての葉を落として休眠するものを落葉樹といいます。
18 舌状花 <small>ぜつじょうか</small>	頭状花（27番参照）をつくる花の一つで、花びらがくっついていて、もとの方は筒状ですが、上部は舌状に伸びているものです。



- 19 ^{ぜんちよう} 全長 鳥の場合は、次の図のようにして測定した値です。
- 
- 20 ^{そうじやく か} 装飾花 アジサイなどのように、おしべやめしべが退化し、がくや花びらが大きく発達して、よく目立つ花です。
- 21 ^{そうほうへん} 総苞片 花や花序（花の集団）の基の部分にあって、花びらなどを包む葉の変形したもので、その1枚1枚を総苞片といい、集まり全体を総苞といいます。
- 22 ^{たくよう} 托葉 葉柄（36番参照）の付け根にある付属物のことで、葉状、針状、さや状などの形があります。
- 23 ^{たねんそう} 多年草 冬に地上の葉や草が枯れても、根や地下茎が生きていて、春にはまた葉や茎を出す草をいいます。
- 24 ^{ちようかんたい} 潮間帯 潮が満ちたときの海面から、潮が引いたときの海面までの間に現れる岩場などをいいます。
- 25 ^{つぎき} 接ぎ木 植物の枝や芽を他の植物に接いで成長させることをいいます。
- 26 ^{せい} つる性 他の植物や塀などに支えられながら、垂直方向に伸びていく性質のことをいいます。
- 27 ^{とうじよう か} 頭状花 たくさんの小さな花が集まり、そのまわりをがくのような総苞（21番参照）が包み、全体が一つの花のように見えるものです。
- 28 ^{とうじよう か} 筒状花 花びらが互いにくっついて管状または筒状になった花です。
- 29 ^{ふい} 斑入り 植物の葉は本来単色ですが、色素の関係で白や黄色、あるいは赤などのまだら模様になっていることをいいます。
- 30 ^{ふうばい か} 風媒花 風によって花粉を運んでもらうタイプの花のことです。虫や鳥を引きつける必要がないので目立たず、大量に花粉をまき散らすものが多いです。
- 31 ^{ぶつえんほう} 仏炎苞 花穂（6番参照）をおおいかぶさるように広がる苞（33番参照）をいいます。
- 32 ^{ぶんれつよう} 分裂葉 切れ込みのある葉をいいます。
- 33 ^{ほう} 苞 花を構成する部分の一つで、葉の変形したものです。
- 34 ^{ほうし} 胞子のう 胞子が作られる袋状の器官をいいます。熟すと破れて胞子が飛散されます。
- 35 ^{せい} ほふく性 植物についていえば、垂直方向ではなく水平方向に伸びていく性質のことをいいます。
- 36 ^{ようへい} 葉柄 葉身と茎の間の部分で、葉身を支えています。水分や養分の通り道があります。
- 37 ^{りゅうちよう} 留鳥 年間を通じて同じ場所に生息し、季節による移動をしない鳥のことです。ただし、種全体として見た場合を指すので、個体としては移動をしていることもあります。
- 38 ^{けい} りん茎 地中にある茎の一種で、厚く多肉化したりん片が集まっている茎のことをいいます。
- 39 ^{へんじよう} りん片状 生物体の表面がウロコ状のものをいいます。
- 40 ^{じよう} 口ゼット状 葉が平面状、放射状、円盤状に広がっている様子をいいます。

[参考資料]

以下の論文は、「かまくらちょうNo.96」（三浦半島昆虫研究会2020年1月発行）に掲載されたものです。



かまくらちょう No.96, Jan. 2020

逗子市池子（逗子中学校）でコオイムシを採集

岸 遥斗・山浦 安曇・川島 逸郎

逗子市池子の屋内でコオイムシ *Appasus japonicus* (Vuillefroy) を採集し、飼育した経過を報告する。

採集状況・記録

採集場所は逗子市池子4丁目の逗子中学校の校舎内4階教室で、2017年9月11日の午後1時30分頃、床を歩いていた本個体を発見した。発見時は姿形の類似からタガメ *Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy) の幼虫かと思いい、持っていた筆箱に入れて持ち帰った。帰宅し家で調べてみると、コオイムシであることが判明した。

1♀, 逗子市池子4丁目(逗子中学校4階教室), 11.IX.2017, 岸 遥斗採集・標本保管 [写真1].



写真1 採集したコオイムシ。

従来記録から明らかになったこと

これまで三浦半島においては、横浜市金沢区釜利谷(佐野, 2018), 葉山町峯山の池(荻部・高桑, 1994), 同下山口(高桑・荻部, 1996; 小口, 2017), 横須賀市観音崎(角田, 2002), 同湘南国際村2丁目(小口, 2017), 同須軽谷(佐野, 2017), 三浦市初声町入江矢作海岸(倉持他, 2013), 同初声町和田(芦澤, 2010; 佐野, 2017)の10例が知られている。とりわけ、2010年代に入ってから記録が増えている点に注目されるが、逗子市からの記録はない。したがって、本市域での採集例は初めてとなる。

記録個体は学校構内で得られたが、当時構内で昆虫に関心の高い職員や生徒が想定できず、加えて、校舎の4階で見出された点から、人為的な持ち込みの可能性は薄く、飛来によるものと推察される。

飼育の状況

本種は上述のとおり、三浦半島では最近になって記録が増加しているものの、神奈川県絶滅危惧IB類に判定されており(荻部, 2006), 県内での絶滅が危惧されている種で



写真2 飼育ケースの様子。

あることから、本個体を飼育することにした。

飼育環境は、15 cm × 30 cm の飼育ケースの底に、水槽の底砂材として使われるソイルを2～3 cm 程度の厚さで緩やかな坂になるように敷き、足場となるよう、直径約5 cm の小石を6個まばらにおき、水深を約3 cm に維持した(写真2, 3)。

給餌の頻度は、3日～1週間に1度のペースで餌を与えた。餌は、比較的採集しやすいオカダンゴムシやワラジムシ類、室内にいたハエトリグモ類やクロゴキブリの幼虫、水草などにしばしば付いている貝、飼育していたアルテミアの成体などを与えた。



写真3 上から見た飼育ケースの様子。

給餌方法は、コオイムシの近くに餌を落として与えた。すると飛びつき前脚で餌を抱え込み、口物を餌に刺し、消化液を流し込んで溶かし体液を吸った(写真4～7)。しかし、水温が低いときは、水の浅い水槽の角の方でほとんど動かず、餌を与えても食いつかないことが多かった。また、動きの鈍い餌を与えた場合も食いつかないことが多く、餌を割り箸でつついて動かしてやると、すぐ餌に飛びつき捕食した。冬の間、餌がとれず3ヶ月間餌を与えられない期間も絶食に耐え、活発であった。

飼育しながら観察し分かったことは、ほとんどの時間は足場の小石の上で呼吸器を水面に出して動かずに餌を待っていたことである。そして1時間ほど後に再び観察してみると、餌を待っている位置が変わっていたことから、時々移動していることが分かった。

観察しながら飼育を続けていると、2018年3月頃、足場用に置いた小石の上に黄色っぽい米粒のようなものが数粒付着しているのを発見したため、詳しく観察してみると卵であった。本種は通常、雌が雄の背中に卵を産み付け、雄がふ化まで保護するとされるが、1個体しかいないため、しかたなく小石の上に産んだと思われる。しかしこのことから、本個体が雌であることが判明した。これらの卵は孵化せず、1ヶ月後には消滅し水槽内で確認できなくなった。

観察と飼育を続けていたが、その後2019年5月3日には死亡したため標本にした。

引用文献

- 芦澤一郎, 2010. 三浦市初声町で記録されたシマゲンゴロウ他の昆虫, かまくらちょう, (75): 43.
- 菟部治紀, 2006. 水生半翅類・高桑正敏・勝山輝男・木場英久(編)神奈川県レッドデータブック生物調査報告書2006, pp.337-339. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 菟部治紀・高桑正敏, 1994. 神奈川県を主としたコオイムシ属2種について. 神奈川自然誌資料, (15): 11-14.
- 倉持敦子・倉持卓司・川島逸郎, 2013. 潮だまりの海水中から見出されたコオイムシの記録. 神奈川虫報, (179): 54-55.
- 小口岳史, 2017. 三浦半島で観察したコオイムシ. かまくらちょう, (91): 29.



写真4 餌を待っているコオイムシ.



写真5 餌のハエトリグモ類を水面に落とした.



写真6 餌に飛びつくコオイムシ.



写真7 餌に針を刺し消化液を流し込む様子.

佐野真吾, 2017. 三浦半島中南部の水田で確認された止水性水生昆虫. 観音崎自然博物館研究報告たたらはま, (21): 1-5.

佐野真吾, 2018. 横浜市金沢区で採集したコオイムシの記録. かまくらちょう, (93): 24-25.

角田 亘, 2002. 福島県と神奈川県のコオイムシとオオコオイムシの外部形態. 横須賀市博物館研究報告 (自然科学), (49): 21-33.

■第7版 編集・執筆にあたった先生（逗子の自然研究会）

監修 阿部 裕司（小坪小学校校長）
福島 慧（逗子中学校） 岡本 遼太郎（久木中学校） 三宅 裕（沼間中学校）
担当 出居 尚樹（逗子市教育研究相談センター）

■編集・執筆に携わった先生方

高島 俊二 桜井 玉吉 荒川美智子 大久保公與 荒木 匡 阿部 裕司
松枝 正樹 伊藤 一美 松枝 英樹 三宅 裕 服部 純子 横地 拓男
花本 綱 吉瀬 孝昭 根岸 泰夫 熊沢 元 枚山 英廷 久世麻里子
黒柳めぐみ 池上 慎吾 小島恵美子 根津準一郎 小松 大将 赤岩 美香

■協力してくださった方々

池田 等（元葉山しおさい博物館） 小林宏一郎（ずしし環境会議）
柴田健一郎（横須賀市自然・人文博物館） 高橋 昭善（横須賀市自然・人文博物館）
内船 俊樹（横須賀市自然・人文博物館） 河野えり子（観音崎自然博物館）
高橋 健司（写真家） 篠田 親宏 岩見 仁 花井 和男 穴倉 貴之
大谷 清治 岸 遥斗（逗子中学校卒業生） 川島 逸郎（生物画家）
山浦 安曇（理科ハウス）
逗子市立小・中学校 逗子市消防本部 逗子市緑政課 逗子市社会教育課

■表紙・裏表紙の写真

（表紙）メジロ
（裏表紙）ホトトギス（ユリ科）

■参考文献

「山溪カラー図鑑 日本のきのこ」 山と溪谷社
「フィールド図鑑 コケ」 井上浩 東海大学出版会
「指標生物-自然をみるものさし」 思索社
「野外における危険な生物」 思索社
「検索入門 しだの図鑑」 光田重幸 保育社
「フィールドガイド 日本の野草 春, 夏, 秋」 菅原久夫 小学館
「フィールドガイド 日本の樹木 上, 下」 中川重幸 小学館
「池子シロウリガイ類化石調査最終報告書」 横浜防衛施設局
「検索入門 樹木①, ②」 尼川大録・長田武正 保育社
「エコロジーガイド 日本の帰化生物」 鷲谷いづみ・森本信生 保育社
「神奈川県植物誌1988」 神奈川県植物誌調査会編 神奈川県立博物館
「原色日本植物図鑑 草本編Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ」 北村四郎・村田源・堀勝・小山鐵夫 保育社
「自然観察と生態シリーズ 3, 4」 牧野晩成 小学館
「野外観察ハンドブック」 岩瀬徹・川名興・中村俊彦 全国農村教育協会
「昭和53年度全国地学教育研究大会 野外見学案内書」 神奈川地学会編
「フィールド図鑑 クモ」 新海栄一・高野伸二 東海大学出版会
「四季花ごよみ」 講談社
「消防年報 2014-2019」 逗子市消防本部
「野鳥識別ハンドブック」 高野伸二 (財)日本野鳥の会
「改訂増補 牧野新日本植物図鑑」 牧野富太郎 北隆館
「山溪名前図鑑 野草の名前 春, 夏, 秋冬」 高橋勝雄 山と溪谷社
「野草のロゼットハンドブック」 亀田龍吉 文一総合出版
「藤沢の自然1 身近な草・きのこの語らい」 藤沢教育文化センター
「藤沢の自然2 身近な藤沢の鳥と親しもう」 藤沢教育文化センター
「小学館の図鑑NEO 新版 昆虫」 小池啓一・小野展嗣・町田龍一郎・田辺力 小学館
「小学館の図鑑NEO 新版 植物」 門田裕一 小学館
「ポプラディア大図鑑WONDA 昆虫」 寺山守 ポプラ社
「ネイチャーウォッチングガイドブック 日本の貝」 高重博・武井哲史 誠文堂新光社

逗子の自然

発行 2021年（令和3年）4月1日（改訂7版）

編集・発行 逗子市教育研究相談センター 〒249-0005 逗子市桜山5-20-29
編集協力・印刷 有限会社 石橋印刷 〒250-0876 神奈川県小田原市中新田9-3

知ってた？

池子の森自然公園に残された貴重な自然！！

池子の森自然公園を整備するにあたり、平成26年度に現地調査を実施しました。その結果、多くの動植物が確認され、貴重な自然が残されていることが分かりました。

自然環境が保たれている理由の一つとして、約80年もの間、ほとんど人の手が入っていない状態だったことが考えられます。団地やマンションなどの宅地開発がなかったため、公園内の森林は時間をかけて自然の遷移が進みました。

コナラを主体とした落葉広葉樹林を中心に、尾根筋などにはスダジイやアカガシなどからなる常緑広葉樹林、谷沿いではイロハモミジやケヤキなどの斜面林など多様な森林が見られます。また、園内を流れる久木川の上流部には大きな池があり、その周辺にはヨシやマコモなどの湿性植物もまとまって見られ、全国的な重要種のタコノアシも生育しています。

このような樹林や草地などを生活基盤として、昆虫や野鳥など様々な生き物が多く生息することが確認されました。ぜひ、開園日には、池子の森自然公園で自然を感じてみてください。

現在も「池子の森自然公園自然環境調査会」という組織に引き継がれ、継続的に調査を行っています。新たな見地も充実した内容を主な調査項目ごとに紹介します。

久木川のホタル生息地

ホタルは池子の森自然公園を代表する生きもののひとつです。池子では8種類のホタルが確認されており、そのうちゲンジボタルとヘイケボタルは私たちの周りには最も身近なホタルとして有名です。ゲンジボタルは5月中旬から6月下旬に、ヘイケボタルは6月中旬から7月初旬に見ることができます。



2016年から続けている調査で園内では8か所のホタルの生息地を確認していますが、場所によってゲンジボタルの発生の時期が異なっている、年間の降雨条件によってヘイケボタルの発生が左右される場所があるなど、“池子の森自然公園のホタルの不思議”が少しずつ分かってきています。



池子の森自然公園（点線内）



マシジミ

池や久木川周辺の昆虫と水生生物

久木川や池とその周辺では、ウチワヤンマ、ヤマサナエ、コサナエ、リスアカネなどトンボ類が豊富です。また、中央の水路ではマシジミ（淡水に棲む二枚貝）が生息しています。

マシジミは淡水の河川の砂礫底に生息している二枚貝で、一般的に見ることができる貝でしたが、近年では外来種であるタイワンシジミの影響で数を減らしてきています。

神奈川県内でもマシジミの生息はきわめて少ないとされています。

ユビナガコウモリとアブラコウモリ

池子の森では、洞くつをねぐらにするユビナガコウモリと、家屋（かおく）のすきまなどをねぐらにするアブラコウモリの2種が確認されています。アブラコウモリは日没後、まだ明るいうちにねぐらから飛び出し、上空で時に体をひるがえし昆虫を捕らえる姿が公園以外でも観察できます。一方、ユビナガコウモリは名のとおり指が長く細長いかま状の翼を持ち、暗くなってからねぐらを飛び出し高速で飛翔するため、観察が難しい種です。いずれの種も食虫性で、夜間に飛翔しながら大量に昆虫を捕食します。



ユビナガコウモリ



森林性鳥類の生息地

池子の森の後背林として広大な広さを有する豊かな森林があってこそこの公園の豊かな鳥類相が保たれています。夏鳥としてオオルリ、キビタキ、ホトトギス等が、冬鳥ではベニマシコ、シメ、イカル等が、秋の渡りの時期はエゾビタキ、ノビタキ等が見られます。

過去、4年間の調査では、約90種もの鳥たちが記録されています。都市公園である池子の森をこれだけ多くの鳥たちが利用していることは素晴らしいことです。



オオルリ

また、見逃せないのが絶滅危惧II類（VU）である夏鳥のミゾゴイです。

番（つがい）で行動しているのが観察されていますので、繁殖の可能性は大きいです。

シュレーゲルアオガエルの生息地

東側の谷戸の奥で生息が確認されています。逗子市内では本種の確実な生息地は確認されていないため、池子の森での保全が望まれます。5月ごろには「コロロ、コロロ」とさかんに鳴いているのを聞くことができます。

2019年は鳴き声を確認されましたが、2020年は確認されませんでした。



0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100
110
120
130
140
150
160
170
180
190
200



逗子市立		中学校	第	学年	組
番	氏名				